

京都府埋蔵文化財情報

第122号

研究ノート 桂川右岸地域における古墳時代集落の動向(5)-----古川 匠---	1
平成25年度発掘調査略報-----	24
1. 石田谷遺跡第3次	
2. 門田遺跡第4次	
3. 水主神社東遺跡第4次(D地区)・下水主遺跡第3次(A北地区)	
4. 下水主遺跡第4次(F地区)	
5. 松井横穴群第3次(12トレンチ)	
6. 中古墳群第2次・三日市遺跡確認調査	
資料紹介 美濃山廃寺出土冶金関連遺物について(補遺)-----関広尚世---	33
資料紹介 美濃山瓦窯跡から出土した「西寺」文字瓦-----引原茂治---	35
長岡京跡調査だより・118-----	37
普及啓発事業-----	39
センターの動向-----	41

2013年12月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

桂川右岸地域における古墳時代集落の動向(5)

古川 匠

13. 天王山・円明寺地区の様相(第10図・附表)

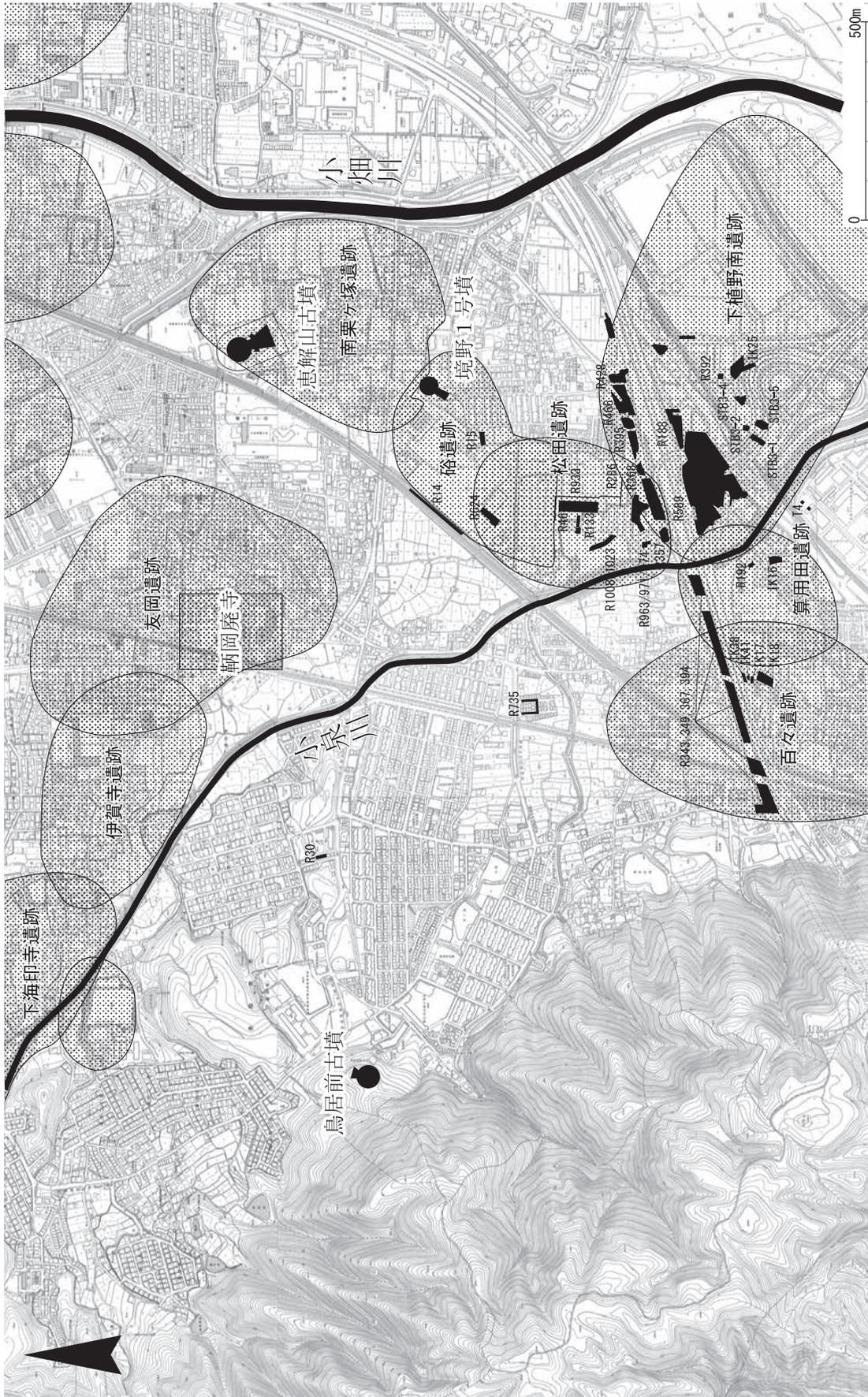
この地区は小泉川下流域に該当し、小泉川の旧流路沿いではほぼ古墳時代全体を通して集落域が形成される。特に下植野南遺跡、松田遺跡は高速道路建設に伴う発掘調査事例が多く、両遺跡を中心として周知遺跡の範囲に留まらない大規模な集落が形成された時期があったことが判明している。松田遺跡、下植野南遺跡では弥生時代後期末以降に集落が形成されるが、弥生時代後期末から古墳時代前期の集落は複数の流路に分断され広域に居住域が分散している。居住域が竪穴建物と小型の掘立柱建物から構成されることは、他の小地域における前期の流路・河川沿いの集落と同様である。中期になると居住域は一見縮小するが、初期須恵器、韓式系土器、カマド形煮炊具といった先進的な器物が桂川右岸地域の中では比較的早い段階で登場する。そして後期になると竪穴建物の棟数が飛躍的に増加する。小型の掘立柱建物も数棟建っており、この時期の桂川右岸地域では有数の規模の集落である。また、本格的な鍛冶生産が行われていたことも判明している。小泉川の本流と淀川の合流点付近に立地する集落として、特に古墳時代中期後半から後期にかけて物流の拠点だったようである。ただし、古墳時代終末期から飛鳥時代になると、集落規模は急速に縮小し、やがて廃絶する。また、この集落のもう一つの特徴は有力集落であるにもかかわらず中海道遺跡、今里遺跡、上里遺跡に見られるような建物の階層差が一貫して存在しないことである。

裕遺跡、算用田遺跡は、上記の松田遺跡、下植野南遺跡の西に隣接し、居住域の形成時期および盛衰がおおむね同時期である。遺構の検出地点も下植野南遺跡に近接することから、特に後期には同一集落であったと考えられる。

百々遺跡はさらに西に位置し、後期以降に居住域になるようである。この遺跡でも下植野南遺跡と同様に鍛冶関連遺物が出土している。松田遺跡、下植野南遺跡が最大規模であった段階は同一集落であった可能性がある。しかし、松田遺跡、下植野南遺跡が衰退する終末期になると、むしろ竪穴建物の棟数が増加している。百々遺跡は近隣の集落遺跡と比較すると調査事例が少ないため、詳細な様相は不明な点が多い。

14. 桂川右岸地域全体の様相

これまでの集積の分析をもとに桂川右岸地域の古墳時代集落の全容について素描する。本論では、桂川右岸地域について以下のとおり小地域区分を行う。第1地域は、寺戸川上流域の集落遺



第10図 大山崎町 古墳時代集落分布図(S=1/15,000)
(都市計画地図「海印寺」「神足」「天王山」「円明寺」)

付表

裕遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 14・ R 15	旧流路、小土坑（中期であるようだが実態不明）	－	－	長岡京市史資料編
R 624	流路1・竪穴建物6（前期）、周壁溝4・掘立柱建物1・柵1・土坑2・柱穴（時期不明）	詳細不明	竪穴建物13、土坑20、柱穴多数、溝3、沼	長七 年平 10

松田遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 46	流路	土師器（初頭）、須恵器	竪穴建物、流路（弥生）、溝（中世）	大山報4
R 133	旧河道（弥生～古墳）	須恵器	溝（弥生）	大山崎町の歴史と文化1984
R 286	竪穴建物1（TK10）、自然流路（時期不明）	須恵器	－	大山報14
R 357	弥生後期～古墳前期の遺構、土坑（TK23～47）、須恵器大壘集積、洪水堆積層	須恵器・土師器（後期後半～後期末）、滑石製勾玉	－	府七概47
R 624	流路1・竪穴建物6（前期）、周壁溝4・掘立柱建物1・柵1・土坑2・柱穴（時期不明）	－	竪穴建物13、土坑20、柱穴多数、溝3、沼	長七 年平 10
R 933	竪穴建物7、掘立柱建物2（後期）	土師器、須恵器	流路・溝（縄文晩期）、溝（弥生）、竪穴建物・掘立柱建物（飛鳥）、掘立柱建物・溝（中世）	大山報40・41
R 963・ R 971・ R 974	竪穴建物3（TK208～47、MT15）	－	－	府七報集137
R 1008 R 1023	竪穴建物1（初頭）、竪穴建物4、溝2（TK43）	土師器、須恵器、緑色凝灰岩、フイゴ羽口	竪穴建物2（弥生）掘立柱建物、溝（奈良～平安）井戸、土坑（中世）	府七報集153

下植野南遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 188	竪穴建物14（SH70のみ布留最新段階。ほか13棟はMT15～TK10）、柵5、土坑5、土器棺墓1（後期）、溝3（前期～後期）	土師器（初頭～後期）、須恵器（TK208・MT15～TK10）、土製品、滑石製玉類	－	大山報13
R 357・ R 368・ R 395・ R 428・ R 466	竪穴建物2・掘立柱建物5・溝（初頭）、竪穴建物3（前期）、竪穴建物1（TK208）、竪穴建物10（MT15～TK10）、竪穴建物2（終末期）、埴輪棺（川西3期）、祭祀遺構	土師器（初頭～前期）、須恵器（中期～終末期）、玉類	土器棺墓（縄文）、方形周溝墓（弥生）、井戸・掘立柱建物・土坑・道路状遺構（平安）ほか多数	府七報告25
R 589	竪穴建物5・井戸状遺構2・溝状遺構3（前期）、土辺古墳（後期末）、竪穴建物45（中・後期）、掘立柱建物30以上（MT15～TK10が主体）	須恵器、土師器、製塩土器、玉類、埴輪（川西2期）	方形周溝墓（弥生）、掘立柱建物・井戸（平安）、久我畷道路側溝（中世）	府七報告35
I K 25	竪穴建物2（詳細不明）、土坑・井戸（前期）	土師器	溝（平安）	府七概90

算用田遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
I K 16	竪穴建物1（初期）、竪穴建物3（後期）、溝・落ち込み（前期）	土師器（初頭～前期、生駒山西麓産、東海系を少量含む）、須恵器（TK23～TK209）	竪穴建物、掘立柱建物、土坑（飛鳥）	府七概53
R 192	竪穴建物5（TK23～47）、土坑3	土師器（布留古相～）、須恵器（TK23～47）	－	大山報9

百々遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
I K 18	溝 (TK73 か)、土坑	土師器・須恵器 (初期須恵器)	-	大山報 24
I K 41	自然流路	土師器 (布留Ⅳ)	-	大山報 22
R 349	甕埋納土坑 (前期)、流路 (MT15 ~ TK10)、 竪穴建物 1 (終末期)	土師器	竪穴建物 (弥生)、掘立柱建物・ 橋脚・西国街道・瓦器埋納土 坑 (中世)	府七報 24
R 367	竪穴建物 1 (MT15 ~ TK10)、竪穴建物 2・排 水溝 (終末期)	-	土器埋納遺構 (弥生)、掘立柱 建物・井戸 (中世)	府七報 24
R 394	流路 (MT15 ~ TK10)、竪穴建物 2・土坑 (終 末期)	須恵器	土坑・井戸・掘立柱建物 (中世)	府七報 24

上記以外 (長岡京右京ほか)

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 30	-	須恵器	-	大山報 4
R 735	自然流路	土師器	庭園遺構	大山報 33
T 4	包含層	土師器・須恵器 (TK10)	-	大山報 4

第2図～第9図掲載遺跡 一覧表 補遺

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
ANK-58	流路 (飛鳥～奈良以前)	-	耕作関連溝 (中世以降)、耕作 関連溝・土坑・落ち込み (近世 以降)	向日 60
ANK-59	包含層 (TK43 ~ TK217)	須恵器 (TK43 ~ TK217)	-	向日 59
ANK-64	埴輪 (中～後期)	-	-	向日 72
ANK-65	竪穴建物・土器だまり・土坑・流路ほか (弥生 末～初頭)	土師器 (初頭)、須恵器 (TK209 ～ TK217)	-	向日 81
ANK-66	流路跡、溝	土師器 (初頭)、須恵器 (TK47)	-	向日 76

森本遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 120	竪穴建物 6 (終末期)	須恵器 (TK209 ~ TK217)	-	向日 10
P 135	土坑 6 (TK209)	須恵器	掘立柱建物群 (長岡京期)	向日 11
P 335	-	須恵器 (TK43)	-	向日 69

修理式遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
修理式 6 次	水田・溝・凹地・畦畔状遺構・流路・用水路 (前期)	-	-	向日 53

殿長遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 34	溝 (前期前半)	-	-	府埋概 1971
P 415	溝 (弥生～古墳)	-	-	向日 59

野田遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
立会 95221	旧流路 (弥生～長岡京)	-	-	向日 80

澁川遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 476	流路	笠形木製品	-	向日 84

宝菩提院廃寺

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 581	瓦窯跡 (飛鳥)	-	-	向日 48
R 632	幢幡遺構 (飛鳥)	-	-	向日 70 - 1
R 883	平瓦	-	池 (近世)	向日 76
R 885	柱穴、幢干支柱、軒瓦、埴仏	-	柱穴・溝 (中世～近世)	向日 76
R 923	-	須恵器 (TK10)	宝菩提院廃寺関連遺構 (古代)	向日 79

古城遺跡 (大牧遺跡)

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 637	大牧 3 号墳 (後期末)	-	-	向日 78

長岡宮・京跡 (※第 2 図掲載分補遺)

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 305	流路 (TK23 ~ TK47 の土師器、須恵器が一括廃棄)	土師器、須恵器		向日 62 - 1
L 451	湿地状堆積	須恵器 (TK208)	道路側溝 (長岡京)、流路 (中世)	向日 58 - 2
L 511	流路 (弥生～古墳)	-	-	都城 19・向日 81
L 383	-	土師器、須恵器 (中期以降)	-	向日 44

鶏冠井山畑遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 75	-	埴輪 (須恵質)、須恵器 (後期)	-	向日 4
P 165	古墳周濠	円筒、盾形埴輪 (4 期)	長岡宮大極殿院回廊	向日 18

羽束師遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
左京四条二・三坊 (昭 61)	水田 (終末期～)	須恵器 (TK217)	水田 (奈良)、道路側溝・路面・建物・井戸・柵・土坑・溝 (長岡京)、流路・井戸・柱穴・木棺 (平安～鎌倉)	京埋研概 昭 61

内裏下層遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 59	壺棺墓 (前期前半)	壺 (前期前半)	-	府埋概 1975

中福知遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
L 29・34	包含層 (庄内～布留)	-	-	向日 6
L 226	自然流路・杭列 (TK217)	-	掘立柱建物・溝 (長岡京)、溝 (平安～)	府七概 39
L 252	杭跡 (古墳時代以前)	-	溝・自然流路 (長岡京)、溝・土坑・掘立柱建物 (平安)、掘立柱建物 (中世)	府七概 43
L 398	旧小畑川	須恵器 (TK217)	-	向日 47
L 422	-	須恵器 (TK10)	道路側溝 (長岡京)、素掘り溝 (中世)	向日 49

上里遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
立 90108	土坑 2 (後期)	—	—	長七年 平 2
R 878	溝	土師器、須恵器	竪穴建物・土器棺墓・土墳墓 (縄文)、土器棺墓・土坑 4 (弥生)、掘立柱建物 5・柵列・道路側溝 (長岡京)	京埋研報 2006 - 34
R 956	溝	土師器、須恵器	竪穴建物・炉・土器棺墓・土坑・柱穴・配石遺構 (縄文)、竪穴建物・掘立柱建物・土器棺墓 (弥生)、掘立柱建物、汎濫原	京埋研報 2009 - 9

開田遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R 102	溝 (前期前半・後期)	土師器、須恵器	—	長七報 1

※遺構の時期区分については、弥生時代後期末を (庄内 2・3 期)、古墳時代初頭を (庄内 4 期)、前期を (布留 1～2 期)、中期を布留 3 期～TK208 型式期、後期を TK23～TK209 型式期、終末期を TK217 型式期以降とする。それ以外の時期の表記については、各報告の記載内容を尊重した。

※報告書の略号は、向日…向日市埋蔵文化財調査報告書、京埋研概…京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要、京埋研報…京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告、京埋概…京都府埋蔵文化財調査概報、府セ概…京都府遺跡調査概報、府セ報集…京都府遺跡調査報告集、長研報…長岡京跡発掘調査研究所調査報告書、市史資料編…長岡京市史資料編、長連協…長岡京連絡協議会資料、長七年…長岡京市埋蔵文化財センター年報を示す。

※立会調査の略号については、向日市、長岡京市の各機関のルールを尊重し、向日市の立会調査は長岡京内の宮 (P)、右京 (R)、左京 (L)、長岡京市の立会調査は地点に拘わらず (立) の略号を用い、西暦と立会調査次数を示す 4～5 桁の次数を示している。

跡群である。都出比呂志氏の首長系譜分類 (都出1988) では檜原・山田グループの古墳群に近い。松室遺跡、檜原遺跡、下津林遺跡、革嶋館下層遺跡が該当し、古代寺院の檜原廃寺が含まれる。第2地域は、寺戸川中流域および小畑川下流域の集落遺跡群である。向日グループの古墳群に近く、上久世遺跡、中海道遺跡から羽東師遺跡までが該当する。また、古代寺院の宝菩提院廃寺が含まれる。第3地域は、小畑川・小泉川間の低位段丘から寺戸川下流域までの「し」字状の範囲に立地する集落遺跡群である。長岡グループの古墳群に近く、大原野石見町遺跡から雲宮・水垂遺跡までが該当する。古代寺院は乙訓寺が含まれる。なお、鴨田・馬場、吉備寺遺跡は第2地域と第3地域の緩衝地帯に位置する。第4地域は小泉川流域の集落遺跡群である。山崎グループの古墳群に近く、鈴谷遺跡から山崎津跡までが該当する。古代寺院は鞆岡廃寺と山崎廃寺が含まれる。ところで、これまでの関係諸機関による発掘調査によって、中世以前の小畑川の流れは現在と異なり下流域で西から東へ向くことが判明しているため、本稿でもそれに従う。

(1) 弥生時代後期末 (古墳出現直前) の様相 (第11図)

第1地域では、檜原遺跡、下津林遺跡で集落が営まれるようだが調査事例が少なく、詳細は不明である。

第2地域では、中海道遺跡で竪穴建物等が広い範囲に分布しており、土器が大量に出土している。大規模集落として繁栄していたのであろう。外来系の土器としては、近江東海系が少量出土



第11図 弥生時代後期末(S=1/60,000)

している。主に寺戸川右岸の自然堤防、扇状地、段丘面に集落が立地するが、左岸の遺跡では修理式遺跡を例外として流路や水田が認められるのみで、左岸一帯は居住に不適当な湿地帯だったようである。中海道遺跡以外の寺戸川右岸の遺跡を見ると、岸ノ下・辰巳遺跡では長岡宮跡第64次で方形周溝墓群が検出され、森本遺跡の長岡宮跡第285次で吉備地方の搬入土器を転用した土器棺、内裏下層遺跡の長岡宮跡第238・245次で方形周溝墓、竪穴建物が検出されている。しかし、これらの集落規模は中海道遺跡よりはるかに小さいようである。南へ下がると、旧小畑川の右岸で大規模集落の鴨田・馬場遺跡が営まれている。生駒西麓産、近江東海系、吉備系、播磨型庄内甕といった外来系の土器が数多く出土し、湿地帯では水田が存在する。旧小畑川の水利を活かして発展した集落といえるだろう。視点を東に移すと、複数の小河川が桂川に向かって流れ込む一帯では、中久世遺跡、大藪遺跡、東土川・東土川西遺跡などの集落が営まれている。各遺跡の旧流路や溝から多様な外来系土器が出土しており、東土川・東土川西遺跡では居住痕跡は確認されないものの近江東海系、生駒西麓産、吉備系の土器が出土し、中久世遺跡、大藪遺跡では東海系、生駒西麓産土器が出土している。各集落で、河川を介した地域間の交流が活発に行われたようである。

第3地域では、寺戸川下流に沿って大規模集落の雲宮・水垂遺跡が所在する。周溝が付属する大規模な竪穴建物が検出され、湿地帯には水田が展開する。また生駒西麓産、丹後丹波系、大和系といった外来系の土器がまとまって出土しており、第2地域の鴨田遺跡と同様に水利を活かした高い生産性を保持する水上交通の拠点集落と考えられよう。なお、神足遺跡では方形周溝墓が検出され、小規模な集落が存在した可能性が高い。また、この地域では弥生時代後期に、低位段丘面上の今里遺跡、井ノ内遺跡で大規模な環濠集落が営まれていたが、この時期には衰退している。

第4地域では、小泉川中流の伊賀寺遺跡がこの時期に繁栄していたことが近年の調査で判明している。小泉川に面した低位段丘上では、大型の竪穴建物をはじめとする多数の遺構が検出され、流路からは東海系、北近江系、北近畿系、生駒西麓産、摂津または播磨系といった外来系土器を含む大量の遺物が出土している。

この時期には、主要集落が各小地域に分散し、多くは河川沿いの微高地に立地している。そして各小地域の主要集落では有力者の居住を示唆する遺構が検出されている。また、各小地域の主要集落では大量の外来系土器が集中的に出土している。以上の状況は、河川交通を利用し、列島の各地と人、物資、情報の流通網で結ばれた小地域(水系)の核となる集落が点在していたこと、そしてその集落には有力者が居住していたことを示している。

(2) 古墳時代前期初頭(第12図)

第1地域では、革嶋館下層遺跡で、この時期の竪穴建物が数棟、掘立柱建物が1棟検出されている。掘立柱建物は倉と考えられ、寺戸川を介した流通が行われたことを示す遺構と評価できよう。

第2地域では、中海道遺跡で周溝を有する大型掘立柱建物が検出された。倉庫群を従えるこの

建物は首長居館と評価されており、向日丘陵に造り始められた前方後円墳の初期の被葬者の居住地であろう。ただし、この時期以降、中海道遺跡は急速に衰退するため、その後も向日丘陵に造営され続けた首長墳に葬られた人物の本貫地はいまだ不明である。この地域では、引き続き鴨田遺跡、馬場遺跡、吉備寺遺跡および上久世遺跡、中久世遺跡、大藪遺跡、羽束師遺跡が存続し、各集落遺跡からはこの時期の遺物が多量に出土している。交通の結節点として、前段階から各集落が継続的に発展していたのであろう。

前段階には、第2地域と並んで大規模な集落が存在した第3・第4地域はこの時期にはほとんど振るわない。第3地域では、水垂遺跡が一時的に衰退し、建物の棟数が激減している。今里遺跡、開田・開田城ノ内遺跡、神足遺跡では少数の遺構が検出されているが、第2地域の有力集落と比較すると、ほぼ等閑視が可能な内容である。また、第4地域では下海印寺・伊賀寺遺跡が衰退し、小泉川上・中流域で集落が再度継続的に営まれるのは後期に入ってからである。

すなわち、この時期は第2地域が繁栄を継続し、寺戸川を介して連なる第1地域も連動して発展した可能性がある。対照的に第3・第4地域は衰退傾向にあるようで、特に第4地域では顕著である。換言すれば、第2地域を中心とする寺戸川上・中流地域が明確に浮上する時期である。そして、その頂点には中海道遺跡が存在している。さらに並行して、第2地域に含まれる向日丘陵では、桂川右岸地域全体で最初期の首長墳が造営され始める。

(3) 古墳時代前期前葉～前期後葉 (第13図)

第1地域では、桂川に面する松室遺跡が造営され、檜原遺跡でも竪穴建物が検出されている。集落遺跡については不明な点が多いが、この地域でも前方後円墳の造墓活動が継続的に行われるようになる。

第2地域では、前段階にこの地域の中心的存在であった中海道遺跡が急速に衰退する。この時期の向日丘陵で連綿と造営される前方後円墳に埋葬された有力首長たちの居住地は判然としなない。とはいえ、上久世遺跡、中久世遺跡、大藪遺跡、羽束師遺跡、そして鴨田遺跡、馬場遺跡、吉備寺遺跡といった寺戸川、旧小畑川沿岸部の集落は健在であり、多量の遺物が出土している。

第3地域では、水垂遺跡が復興し、更なる発展を遂げる。総じて出土遺物量が多く、この時期以降は寺戸川下流域の一大拠点集落として存続するようである。ただし、同遺跡の集落構成は均等な平面規模の竪穴建物から成り、建物規模、建物立地等には明瞭な階層差を見出し得ない。この点は前期初頭以前の同遺跡と大きく異なる。水垂遺跡の西側の低位段丘面上では、大原野石見町遺跡、今里遺跡、開田・開田城ノ内遺跡で、散発的ではあるが竪穴建物が数棟検出されている。

第4地域では、友岡遺跡(右京第624次地点)で竪穴建物が6棟検出されているが、弥生時代後期末に繁栄した居住域から大きく南東に位置を変え、小泉川左岸の低位段丘面上に移る。ちなみに、これらの竪穴建物は対岸の鳥居前古墳を一望できる立地で、建物の平面規模は桂川右岸地域の他の集落と比較すると大きく、鳥居前古墳を造営した勢力の居住地であった可能性がある。この集落が中期前葉まで存続しない点も、鳥居前古墳の後継となる首長墳が存在しないことと関連するかもしれない。ただし鳥居前古墳とこの集落との綿密な時期比定が現状では困難で、周辺部



第13図 古墳時代前期前葉～前期後葉 (S=1/60,000)

の調査の進展を含めて今後の課題である。

この時期の前方後円墳は、第2地域に隣接する向日丘陵に連綿と造営され、第1地域に隣接する山田・桜谷古墳群も前期中葉には造営を開始する。第2地域では集落の増加と古墳の造営が関連する可能性が高いが、第1地域では山田・桜谷古墳群と集落との関連性は未だ判然としない。

前段階に引き続き、第2地域の優位は継続している。ただし、他地域においても居住を示す遺構が複数の集落で検出されている。また、当然のことながら各集落の盛衰は必ずしも同時に起こらないため、図での提示は不可能であるが、第2地域はこの時期の後半に衰退傾向に入る。そして、その段階には第3地域の雲宮・水垂遺跡が有力集落として浮上する。ただし、上述のように雲宮・水垂遺跡では有力者の居住は認めがたい。前方後円墳が各小地域で造営される重要な時期ではあるが、集落については不明な点が多い。

(4) 古墳時代前期末～中期初頭 (第14図)

この時期は、全体的に遺構の検出例が少ない。注目されるのは、これまで乙訓地域全体で優位を保っていた第2地域、第3地域東部の主要集落が、鴨田・馬場遺跡、水垂遺跡といった南端部の集落以外は衰退することである。この現象は向日丘陵で前方後円墳の造営が終了するのと呼応する可能性がある。特に第2地域における寺戸川中流域の修理式遺跡、久々相遺跡、洪川遺跡ではこの時期の遺物がほとんど出土しておらず、この一帯の土地利用が中断されたことが窺える。水田経営、河川交通に何らかの打撃が与えられたのであろう。ただし、その一方で丘陵部の中海道遺跡で竪穴建物からまとまって韓式系土器が出土していることは、中海道遺跡が前期初頭以降長期間にわたって断絶した後に復興したことと、韓式系土器を使用する渡来系集団の関与も考慮し得る。

この時期は上述の第2地域にとどまらず桂川右岸地域の集落遺跡では、遺構・遺物の検出例が少なく、全体的に沈滞しているといえるが、その中で相対的な存在感が次第に増すのは第3地域の今里遺跡である。この時期の集落規模はいまだ小さいが、以降の大型化を視野に入れると無視はできない。そして集落に隣接して前方後円墳の今里車塚古墳が造営されることも意義深い。

(5) 古墳時代中期前葉～中期末 (第15図)

第1地域では、檜原遺跡で遺物が多く出土する土坑が検出され、この時期に集落が営まれた可能性がある。第2地域では、集落立地が大きく変化し、高燥な段丘面上で主要な集落が営まれる。殿長・岸ノ下・辰巳・森本の4遺跡にまたがる集落では、初期須恵器、韓式系土器が出土している。この時期の居住痕跡は未検出であるが、次段階の大型化を考慮すると、この時期が集落の形成期と考えられる。弥生時代後期末以来断絶していた内裏下層遺跡でも集落域が形成され、初期須恵器が出土する。中海道遺跡も前段階から継続する。

第2地域における集落立地の特徴は第3地域でも同様に見られ、丘陵、台地上では大型化する今里遺跡を筆頭に井ノ内遺跡、開田・開田城内遺跡、南栗ヶ塚遺跡で集落が営まれる。第4地域では小泉川下流沿いの松田遺跡、下植野南遺跡で韓式系土器、初期須恵器が出土し、集落規模は縮小するものの引き続き物流の拠点である。



第14図 古墳時代前期末～中期初頭 (S=1/60,000)



第15図 古墳時代中期前葉～中期末(S=1/60,000)

この時期は、前段階で減少した集落の数が次第に回復する時期である。特に第2・第3地域では主要集落が丘陵や段丘面上に分布を広げる。しかし、集落立地が河川沿いの低平な平地から丘陵・台地上に完全に移行するわけではない。前段階を含め古墳時代中期の低地部の集落は小型化、縮小化の傾向にあるが、一様には衰退しない。寺戸川下流、小畑川下流域の第2・第3地域にまたがる一帯では、韓式系土器、初期須恵器が出土する集落が点在し、流通の拠点としての存在感を示している。雲宮遺跡、水垂遺跡はその好例となるだろう。

（6）古墳時代後期初頭～後期末（第16図）

第1地域では、松室遺跡で掘立柱建物によって構成される集落が営まれる。桂川右岸地域のほとんどの集落では竪穴建物から掘立柱建物への移行が7世紀まで下るが、松室遺跡では2～3世代先行して実現されており、集落の特殊性が窺える。第1地域南部の檜原遺跡は調査事例が少なく、この時期の遺構は確認されていないが、他の集落を見ると中期に存在した集落は後期まで継続しているため、檜原遺跡もこの段階まで存続した可能性がある。

第2地域では、台地や段丘面上に中海道遺跡の集落、殿長遺跡、岸ノ下遺跡、辰巳遺跡、森本遺跡の範囲にまたがる集落が前段階よりも大型化する。特に後者の遺構・遺物の分布範囲は広く、桂川右岸地域全体から見ても屈指の集落に成長する。そして、この集落からは玉類の未製品が出土しており、小規模ながら玉生産が行われていたようである。また、前期以来断絶していた寺戸川中流域の低地部の利用が再開される。そして、前期以来となる前方後円墳、物集女車塚古墳が造営されている。旧小畑川下流域でも集落が増加し、吉備寺遺跡、羽束師遺跡で再び集落が登場する。

第3地域では、西部の丘陵部で上里遺跡、井ノ内遺跡、今里遺跡、開田・開田城ノ内遺跡、神足遺跡といった大型集落が営まれ、他の小地域と比べると集落の密度が高い。そして、後期後葉から後期末にかけての上里遺跡では大型掘立柱建物群が造営される。古墳時代前期初頭の中海道遺跡の大型掘立柱建物以降は、大型の竪穴建物は一部の集落で存在するものの、規模・建物形式の双方で階層の高さを顕示する建物は検出されていない。第3地域でこの時期に登場する意義は大きい。また、井ノ内稲荷塚古墳などの首長墳が第3地域の各集落の近辺で複数造営されることも、当地域の安定した優位性を示している。寺戸川下流の水垂遺跡では、この時期の道路遺構が検出されている。遺構の重複関係から後期の竪穴建物よりは新しいが、主軸方向が一致することから報告者は竪穴建物の廃絶後にほとんど間をおかずに設置された、と推察している。改めて後述するが、この時期に陸路が整備されていたことを示す重要な遺構である。

第4地域では、小泉川下流域の松田遺跡、下植野南遺跡が最大規模に拡大する。鍛冶生産が行われ、製塩土器が大量に出土している。また、近年の調査事例増加により、この集落は多数の竪穴建物、掘立柱建物から構成されていたことが判明している。ただし、掘立柱建物は総じて小型で、機能的には倉と推定され、竪穴建物の平面規模にも顕著な階層差は見出し難い。第4地域で鳥居前古墳以来の首長墳が存在しないことも関連するのであろう。また、小泉川上・中流域では下海印寺遺跡、伊賀寺遺跡、友岡遺跡にまたがる3つの集落が営まれる。小泉川上・中流域に



第16図 古墳時代後期初頭～後期末(S=1/60,000)

立地する集落は前期以来断絶していたのであるが、これらの集落は製塩土器が多数出土するのに対し韓式系土器は確認されていない。また、竪穴建物のみで集落が構成され、集落の立地は弥生時代後期末と変わらず小泉川に面した丘陵裾部である。

（7）古墳時代終末期～飛鳥時代（第17図）

第1地域では、檜原遺跡の西隣接地点で檜原廃寺が造成される。檜原遺跡は調査事例が少なく、上述のとおり古墳時代後期の遺構は検出されていないが、立地から檜原廃寺の造営勢力の居住地であった可能性はある。

第2地域では、殿長・岸ノ下・辰巳・森本遺跡の西に宝菩提院廃寺が造営される。この集落ではこの時期に確実に帰属する建物跡は検出されていないが、遺構・遺物は確認されており、後期以降、この時期にも存続しているようである。宝菩提院廃寺の造営主体と考えて良いだろう。また、飛鳥時代になると古墳時代には居住に適さない湿地帯であった寺戸川左岸で本格的な居住が開始され、久々相遺跡では掘立柱建物で構成される集落が営まれることとなる。

第3地域では、今里遺跡が突出することとなり、古墳時代後期末から終末期に比定される大型掘立柱建物群が検出されている。古代寺院の乙訓寺は今里遺跡の範囲内で造営されており、同時期の今里遺跡の規模や内容から、この集落に居住した有力氏族が造営した可能性は高い。また、前段階の後期中頃に飛躍的に発展した神足遺跡は、この時期以降も規模を保持し続け、第3地域南部の中核的な集落として存在感を示している。

第4地域では、それまでの主要集落であった松田遺跡、下植野南遺跡が衰退し、小泉川上・中流域の下海印寺遺跡も縮小する。代わって大型化するのはい賀寺・友岡遺跡であるが、前段階とは集落の立地が変わり、段丘面上に営まれるようになる。そして集落構成は急激な変化を遂げ、伝統的な竪穴建物から掘立柱建物が主体の集落となる。

15. まとめ

本連載の冒頭で紹介したように、桂川右岸地域の古墳時代を概括した都出比呂志氏は、首長系譜の1単位が水系ごとの生活圏に対応することを念頭に首長系譜論を進められてきた（都出1974・1988）。本論でも、前節では都出氏の論を意識して小地域区分をしている。しかし、この大前提については近年疑義が唱えられている。例えば、縄文時代晩期から古墳時代前期までの遺跡動態を検討した伊藤淳史氏（伊藤2005）は、首長墳が相次いで造営される向日丘陵に隣接する森本遺跡などの集落は弥生時代後期末に減少しており、むしろ寺戸川、小畑川に面する低地部の集落が繁栄することに注目し、首長墳と集落間の空間的な位置関係には隔たりがあることを指摘している。また、古閑正浩氏は桂川右岸地域の古墳時代集落と古墳、古代寺院の分布を検討し、前方後円墳の被葬者である首長の勢力圏は時期によって大きく変動していた可能性を指摘した（古閑2012・2013）。今回の検討から得た知見を踏まえてみても、墓域と集落の盛衰と変動は都出氏の提唱した静的な地域区分では説明しがたい点がある。ただし、その時期は古墳時代前期にはほぼ限定され、有力集落のそばに前方後円墳が営まれる古墳時代中期後半以降には都出氏の地

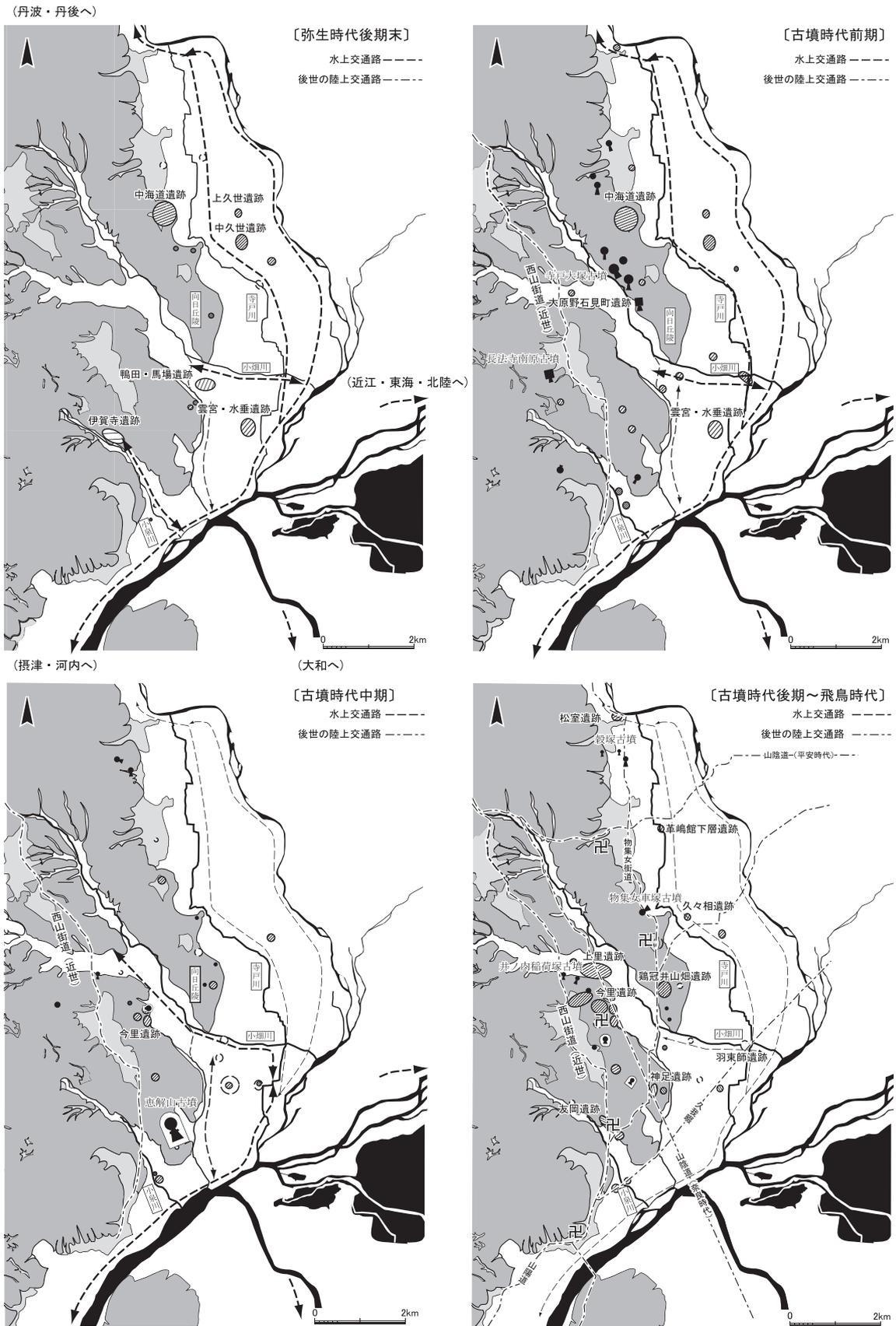
域区分は未だ有効と考えられる。むしろ、地理的に制約される水系毎の勢力圏を越える権力の出現理由を説明する努力が必要ではないだろうか。

ところで、今年(2013年)は『古代寺院と律令制下の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』というテーマの研究会が開催され、京都府内の古代寺院の立地と古代交通路の関係が検討された。以前に菱田哲郎氏は桂川右岸地域の古墳立地と交通路の関係に触れているが(菱田2002)、筆者も古墳時代集落、首長墳の立地と交通路の関係について検討することは、同時に集落と首長墳の関係、なぜそこに古墳と集落があるのか、を解明する上で重要な視点と考える。この視点から、今回の連載のまとめを改めて述べることにする(第18図)。

弥生時代後期末の桂川右岸は、各小地域毎に有力な集落が小河川に隣接して営まれている。各集落で検出される大型竪穴建物と外来系土器から、列島の各地域と独自の交易を行った首長達の併存が想定されるが、古墳時代前期初頭になるとこれらの集落はただ中海道遺跡を残し、消滅または大幅な衰退を余儀なくされる。前期初頭以降は中海道遺跡も衰退するが、ここで注目すべきは第1・第2・第3地域の寺戸川上～下流域、小畑川下流域に集落が集中することである。対照的に第3地域の丘陵上には散発的に遺構・遺物が検出されるのみで、第4地域の小泉川中流域で弥生時代後期末に繁栄した伊賀寺遺跡は完全に断絶してしまっている。

古墳時代前期には、古墳の構成要素である墳丘、埋葬主体部、古墳出土の副葬品、埴輪、そして集落出土遺物等の研究蓄積から、「畿内」中枢部を中心とした汎列島のネットワークが構成されたことは言を俟たない。桂川右岸地域をこの視点から見ると、桂川・淀川を介して「畿内」中枢部と山陽・北近畿・山陰地方を結ぶ流通の結節点にあたる。近代以前の物流の主役は水上交通路であることから、桂川右岸地域をほぼ直線的に南北に貫通する寺戸川は同地域において最も重要な交易ルートと考えられる。以上の理由から、寺戸川に近接する集落が古墳時代前期に増加し、そしてこれらの集落が中海道遺跡を居住地とする首長の元に統合されて一勢力を為し、集落群が立地する河川沿いの低地を見渡す向日丘陵上に首長墓を造営するのであろう。ところで、環境考古学的な調査研究から、弥生時代後期末に減衰した河川活動は古墳時代前期に活発化することが判明しており(中塚2012)、河川に面する鴨田遺跡、雲宮・水垂遺跡、芝ヶ本遺跡では洪水砂層が検出されている。しかし、このように居住に至適とは言いかねる立地に変貌した鴨田遺跡、雲宮・水垂遺跡は断続的に集落が存続している。その理由を端的に示す遺物として芝ヶ本遺跡、長岡京跡左京第531次地点から出土した碧玉製石釧に注目したい。芝ヶ本遺跡からはガラス勾玉の鋳型も出土しており、生産・流通の双方でこの一帯が拠点的性格を担っていたことが理解できるのである。そして、小泉川上・中流域の衰退はこうした物流の大動脈から取り残されたことが最大の原因であろう。古墳時代後期になると下海印寺遺跡等で再び集落が営まれることから、この地域の生産力は本来決して低くはないのである。

古墳時代前期から中期の移行期で注目されるのは、上記の寺戸川中・下流域の集落群の衰退と、今里遺跡に代表される第3地域西部における小畑川右岸丘陵上の集落群の形成である。後者の集落群は長岡グループの首長墳の多くに隣接し、中期から後期にかけての首長墳の造営と同時期に



第18図 古墳・飛鳥時代の物流ルートと主要遺跡の変遷図(S=1/130,000)

繁栄する。対照的に寺戸川中・下流域の衰退は前期末の向日丘陵における首長墳の造営終了とほぼ同時に進行する。したがって、この古墳と集落の消長の一致は、都出氏の述べる日本列島の広範囲にわたる政治変動(都出1988)を矛盾なく示している。また、河川活動の活発化に伴い、河川沿いの低地部から丘陵や段丘面上に集落の好適地が移動したこともこの現象の原因として挙げられよう。ところで物流の視点から見た場合、寺戸川流域の衰退によってこれに代わる新たな流通路の整備が桂川右岸地域に要求された、と推測される。中期から後期の第3地域における首長墳の立地を見ると小畑川西側の丘陵上に位置し、丹波に抜ける近世の「西山街道」とほぼ重複している。直線的な古代官道より実際の地形に制約された「西山街道」ルートのほうが古墳時代の交通路に近いだろう。古墳の立地は交通路を示す、との解釈によれば、今里遺跡等の集落を拠点とした有力首長たちはこの陸路を主要交易路とした、と考えられる。ただし、この陸路の形成は前期まで遡る可能性がある。弥生時代後期末から古墳時代前期の集落が多い旧小畑川下流域の集落は、小畑川を遡上するか、小畑川沿いの丘陵を北西に進めば丹波方面へ直接抜けられる立地である。そして古墳の立地を見ると、第2地域の寺戸大塚古墳は西からの視点を意識して造営されたことが指摘され(國下2000)、第3地域の長法寺南原古墳は「西山街道」ルートに近接し、前方部の埋葬主体部が北近畿系の小竪穴式石室であることが以前から知られている(福永1992)。また、近年このルート近くの大原野石見町遺跡では前期の竪穴建物が検出されている。陸路の形成時期、形成の主体となった勢力の把握は今後の課題である。

第2地域を中心とする小河川沿いの集落では、中期後半から後期にかけて韓式系土器の出土する集落が目立つ(大坪2013)。特に第2地域では前期末の衰退からの復興の道程で渡来系集団が一定の役割を担ったことは想像に難くない。なお、韓式系土器の出土は前期の主要物流ルートである寺戸川、旧小畑川下流沿いに立地する集落に限定され、小泉川上・中流域の集落では出土しない。すなわち、渡来系集団は選択的に主要ルート上の河川に面した集落へ移住しているのである。そして、渡来系集団の移住は当地域の在地勢力だけでなく「畿内」中枢もこのルートの再整備に関与した可能性を示す。というのも後期の第2地域では物集女車塚古墳以外に前方後円墳が存在しないことから首長権力の基盤は脆弱であったようで、累代の前方後円墳を造営し集落規模も安定している第3地域の今里遺跡周辺とは対照的である。また、豊島直博氏によると、第2地域の物集女車塚古墳の副葬武器は当時最新鋭の構成なのに対し、近い時期の第3地域の井ノ内稲荷塚古墳の副葬武器は伝統的なやや古相の構成であるという(豊島2005)。こうした指摘は、後期の段階で既に安定した伝統勢力と化している第3地域の首長と前期以来断絶していた第2地域の新興の首長の性格の差と共に、「畿内」中枢から先進的な物品を入手しやすい寺戸川ルートの優位性をも示すもので、重要である。物集女車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳よりやや古い第1地域の穀塚古墳では優品の帯金具や馬具が副葬される。同地域の後期集落では革嶋館下層遺跡で韓式系土器が出土し、松室遺跡では建物構成がいち早く掘立柱建物主体に変化することを鑑みると、寺戸川ルート上にある第1地域も渡来系集団の助力を得て復興した、と考えられる。そして第2地域と同じく新興の勢力であったが故に、同時期の第3・第4地域の集落に色濃く残存する保守性、

すなわち堅穴建物の継続的使用から脱却し得たのであろう^(注)。

一方で、後期以降の多くの集落の立地は、先述した「西山街道」に限らず古代以降の陸路のルート上に立地する。新出の集落では第2地域の久々相遺跡・羽束師遺跡、第3地域の神足遺跡、第4地域の友岡遺跡が該当し、これらの集落は奈良時代まで継続する。この時期の道路遺構は水垂遺跡に限定されるが、集落分布から見ると古墳時代後期から終末期は古代道路の前身が整備され始めた時期といえるだろう。特にこの変化に敏感に反応するのが第4地域で、中期後半以降同地域の中核集落であり続けた下植野南遺跡が急激に衰退し、そして古閑正浩氏が指摘するように(古閑2013)、上流の友岡遺跡が代わりに興隆して鞍岡廃寺が造営され、そしてやや遅れて淀川沿いの山崎津・山崎廃寺が整備され始める。また、集落の建物構成は堅穴建物から掘立柱建物へと急激に移行する。古墳時代を通じて主要物流ルートから外れていた小泉川中流域が終末期になって新たに勃興し、集落の立地と構成が急激に変化する背景には、桂川右岸地域全体の集落の分布と消長から見ても、「畿内」中枢部を中心とした陸路形成を含む大きな社会変動を想定すべきである。最終的に古代官道整備へ帰着するこの幹線的な陸路の登場は、新たに造営され始めた古代寺院とともに、古墳時代の終わりを告げるものだったのであろう。

おわりに

本論の執筆は、京都府教育委員会主催の「第3回 乙訓地域の首長墓群の歴史的位置付けに関する検討会」(平成23年6月1日)の席上で、筆者が桂川右岸地域の古墳時代集落の動向を発表したことに端を発する。席上では委員の石野博信、杉原和雄、都出比呂志、和田晴吾の4氏からご指導を賜った。また、本連載の執筆前から現在に至るまで、京都市、向日市、長岡京市、大山崎町の関係機関の方々にはデータ提供を含む様々な形でご助言、ご協力をいただいた。末筆ながら心よりお礼申し上げます。また、足掛け2年にわたる連載となったため、各図表には十分に最新の調査データを反映できていない点がある。ご了承願いたい。

(ふるかわ・たくみ=福島県教育委員会派遣)

注 後期の第1地域について、桂川左岸の秦氏の関与を積極的に評価する論者もいる(丸川1989など)

参考文献

伊藤淳史「国家形成前夜の遺跡動態－京都府南部(山城)地域の事例から－」(『国家形成の比較研究』学生社)2005

大坪州一郎「山城地域」(『古代学研究』第199号 古代学研究会)2013

國下多美樹「集落からみた寺戸大塚古墳」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会)2000

菱田哲郎「平安京以前」(『街道の日本史32 京都と京街道』吉川弘文館)2002

古閑正浩「鳥居前古墳の調査成果」(『第80回 古墳時代研究会発表要旨』古墳時代研究会)2012

古閑正浩「橋寺としての山崎廃寺」(『第19回 京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 古代寺院と律令体制下の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会)2013

- 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」（『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会）1974
- 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」（『待兼山論叢』22号 大阪大学文学部）1988
- 豊島直博「武器・武具からみた井ノ内稲荷塚古墳・物集女車塚古墳の被葬者像」（『井ノ内稲荷塚古墳の研究－大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊－』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団）2005
- 中島皆夫「乙訓地域における住まいと移動の歴史－長岡京市域を中心にして－」（『第10回 京都府埋蔵文化財研究会資料集 住まいと移動の歴史』京都府埋蔵文化財研究会）2002
- 中塚良「4 向日市立会第09102次（7 ANDKT地区）～長岡京跡北辺地域、久々相遺跡、渋川遺跡～調査報告」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第93集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター）2012
- 福永伸哉「近畿地方の小竪穴式石室－長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって－」（『長法寺南原古墳の研究－大阪大学文学部考古学研究報告 第2冊－』大阪大学南原古墳発掘調査団）1992
- 丸川義広「洛西山田の古墳分布について」（『京都考古 第51号』京都考古刊行会）1989

いしだだに 1. 石田谷遺跡第 3 次

所在地 与謝郡与謝野町字弓木小字石田谷

調査期間 平成25年 4月24日～7月30日

調査面積 1,080㎡

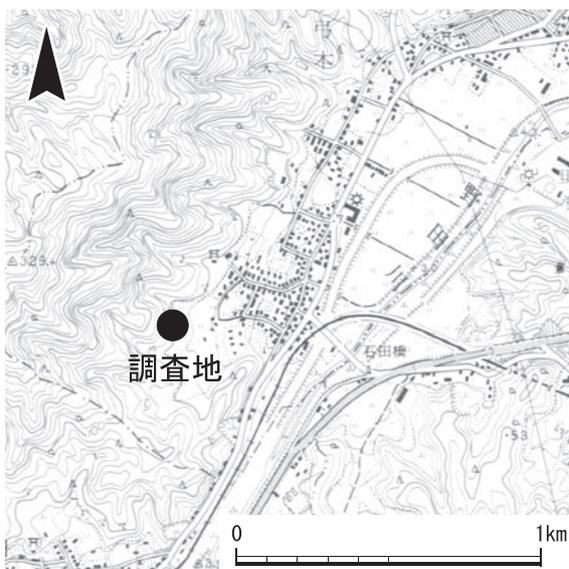
はじめに この調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(野田川大宮道路)新設工事に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。与謝天橋立 I C から京丹後市大宮町森本に至る区間の工事が京都府道路公社により計画され、昨年度から発掘調査を実施している。今年度は石田谷遺跡の調査を行った。

石田谷遺跡は、野田川左岸の丘陵尾根から斜面部に立地する遺跡で、平成23年度に与謝野町教育委員会が試掘調査(第 1 次)を行い、平安時代から中世にかけての散布地として遺跡認定された。昨年度は、当センターによって小規模調査(第 2 次)を行い、その成果をふまえて、今年度に面的な調査(第 3 次)を実施した。

調査概要 第 2 次調査で遺構を検出したトレンチの周辺部を面的に調査したもので、東側の調査地を E 地区、西側を F 地区とした。

① E 地区 この地区で検出した遺構は、竪穴建物 1 棟、掘立柱建物 2 棟、柱穴群などである。また東西方向の谷地形も検出し、ここから多量の土器が出土した。

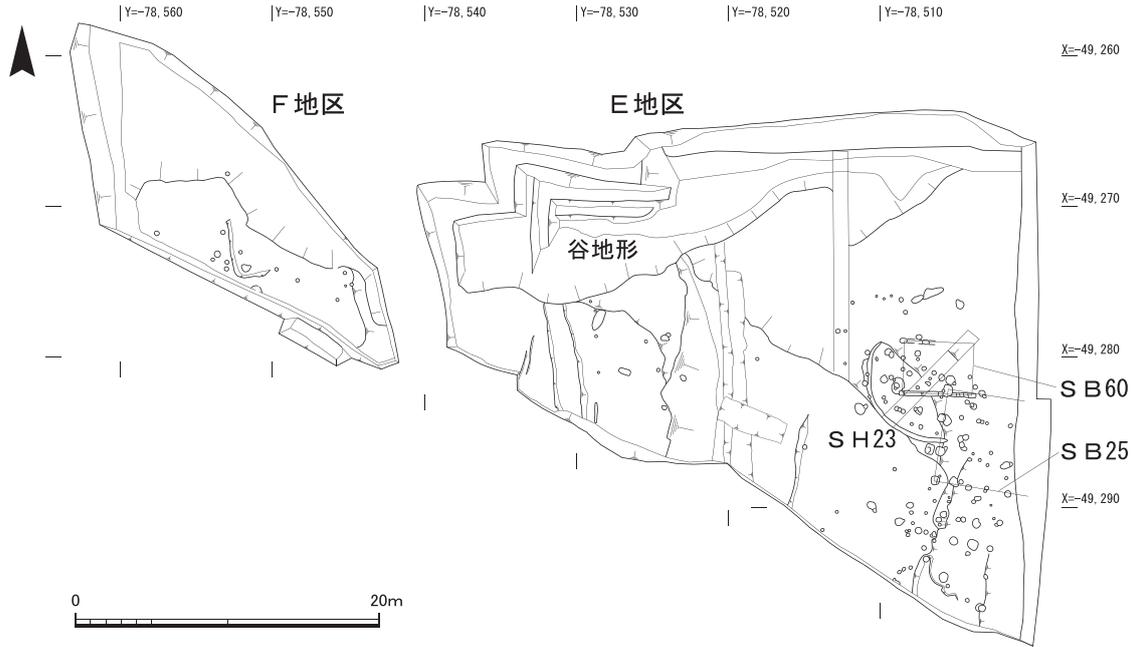
竪穴建物 S H 23 標高36mで検出した径約8.6m、深さ約0.4mを測る円形の竪穴建物である。



第 1 図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 宮津)

建物の東半分は流失しており、西半分の検出となった。検出した壁面に沿う形で、周壁溝を検出した。その規模は、幅0.3～0.4m、深さ約0.1mを測る。部分的に「V」字に掘り込まれた箇所もあった。また床面には、5cm前後の貼り床が施されていた。床面直上から、ヤリガンナや弥生時代後期末から古墳時代初頭の壺・甕底部などが出土した。床面中央付近で径0.4mほどの焼土も確認した。検出した主柱穴は 3 か所で、その配置状況から造営当初は 6 本の柱で構成されていたと考えられる。柱穴は、径0.4～0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。

掘立柱建物 S B 60 S H 23埋土上面から掘



第2図 遺構配置図

り込まれている。規模は、2間(3.5m)×3間(4.6m)、建物の主軸はN88°Wである。柱の掘形の内、南側柱は布掘状に掘られている。布掘の規模は、幅約0.3m、長さ約5m、深さ約0.2mを測り、柱穴部でさらに0.3~0.6m掘り込む。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

掘立柱建物SB25 3間(6.2m)×2間(4.8m)以上、建物の主軸はN9°Eである。建物西辺のみ柱穴の残りが良く、掘形は一辺0.5~0.8mの隅丸方形で、深さは0.1~0.5mである。

谷地形 E地区からF地区にかけて谷地形を検出した。洪水による浸食を受け、崖面が抉られているところもあった。E地区の谷地形からは、弥生時代中期後半の可能性のある土器のほか、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が多量に出土した。

②F地区 古代末から中世にかけての遺物を含む柱穴群や溝を検出した。また、包含層や柱穴から黒色土器片が出土した。

まとめ 調査の結果、丘陵東斜面裾部の微高地上には弥生時代中期後葉から古墳時代初頭、奈良時代から鎌倉時代にかけての集落が連綿と営まれていたことが明らかになった。

今回検出した竪穴建物と同時期の遺跡は、野田川水系では大風呂南墳墓群(岩滝町)がある。この遺跡は、阿蘇海に面したこの時期の代表的な墳墓群で、台状墓から墳丘墓への移行期の遺跡である。この時期の集落の様相を明らかにできる遺跡が少ないなか、今回1基であるが竪穴建物を検出することができた。また、谷地形から出土した弥生時代の土器の中には、被籠土器や土器内面に朱が塗られたものもみられる。こうした調査結果は、断片的ではあるが、当時の集落様相を示す良好な資料となった。

(岡崎研一)

かどた 2. 門田遺跡第4次

所在地 京田辺市大住門田・池島地内

調査期間 平成25年6月18日～7月26日

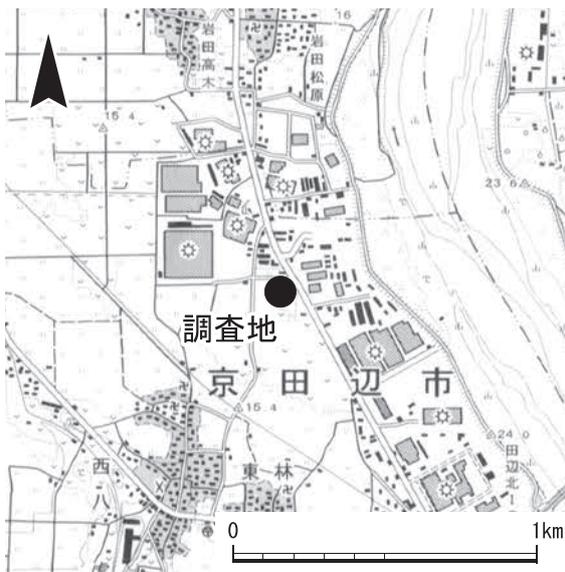
調査面積 591㎡

はじめに 門田遺跡は、木津川西岸の沖積地に展開する集落遺跡である。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

門田遺跡では、これまでに弥生時代から中世までの遺物が出土しているほか、古墳時代の竪穴建物や中世の建物が確認されている。

今回の調査は、橋脚建設予定地3か所を対象に行う計画であり、今回の報告は調査が終了した西側2か所について行うものとする。なお、調査前の現地状況は調査地西側が耕作地、東側が建設資材置き場の造成盛土であった。

調査概要 平成23・24年度調査に引き続き、2か所の調査区のうち西側をI区7トレンチ(約303㎡)、東側をI区8トレンチ(約287㎡)と設定して調査を行った。7トレンチでは、地表下約1.0m(T.P.+14.4m付近)で層厚約0.3mの遺物包含層を、約1.4m(T.P.+14.0m付近)で中世の耕作に伴うと思われる溝群と南西調査区外へ広がる落ち込みを確認した。包含層からは古墳時代の須恵器片と中世の瓦器片が混在して出土しており、中世以降の二次堆積層と考えられる。溝群は、長さ約8.0m、幅約0.5～1.0mの両端がほぼ揃う北西-南東方向の溝が17条並び、その両側に北東-南西方向の溝を1条ずつ検出した。南西隅で検出した落ち込みは深さ約1.8mで、瓦器片および木片が出土した。また、トレンチ北側では溝群を切る北西-南東方向の砂脈を検出した。8ト



調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 淀)

ンチでは、地表下約2.3m(T.P.+13.0m付近)で層厚約0.6mの遺物包含層を確認した。土師器・須恵器・瓦器の細片を含むが、出土量はコンテナ1箱に満たない。

まとめ 今回の調査では中世の土地利用の一端を確認した。また、7トレンチで検出した砂脈は、検出状況からこれまでの調査で検出された慶長伏見大地震に起因する噴砂に類するものと思われる。出土遺物としては7トレンチの溝群と落ち込みから12世紀後半の瓦器椀と白磁椀が、包含層から6世紀後半の須恵器片が出土した。遺構の分布は東側で希薄になる状況を確認した。
(大高義寛)

みぬしじんじゃひがし
 3. 水主神社東遺跡第 4 次 (D 地区) ・
 しもみずし
 下水主遺跡第 3 次 (A 北地区)

所在地 城陽市寺田今橋・金尾

調査期間 平成25年4月26日～9月3日

調査面積 3,300㎡(A北地区：500㎡、D地区：2,800㎡)

はじめに この調査は、一般国道24号金尾交差点改良工事に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。

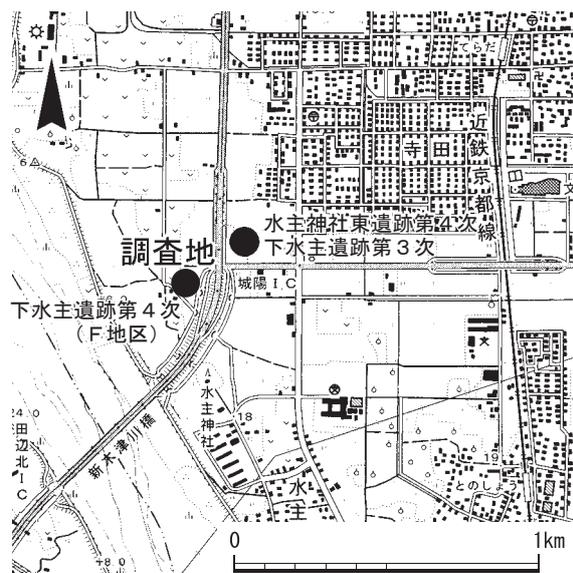
調査概要 調査は、道路予定地内にA北・A～Eの調査区を設定して実施した。このうち、A北・A～C地区が下水主遺跡、D・E地区が水主神社東遺跡に該当する。平成24年度はA～C・E地区の調査を実施し、東西方向の島畑4か所、南北方向の島畑8か所の計12か所の島畑を検出している。これらの島畑は、出土遺物から13世紀前半頃には造成され、13世紀後半～14世紀、15世紀、16世紀に改変が行われ、近世以降の島畑に引き継がれたようである。

今年度はA北・D地区が調査対象となった。

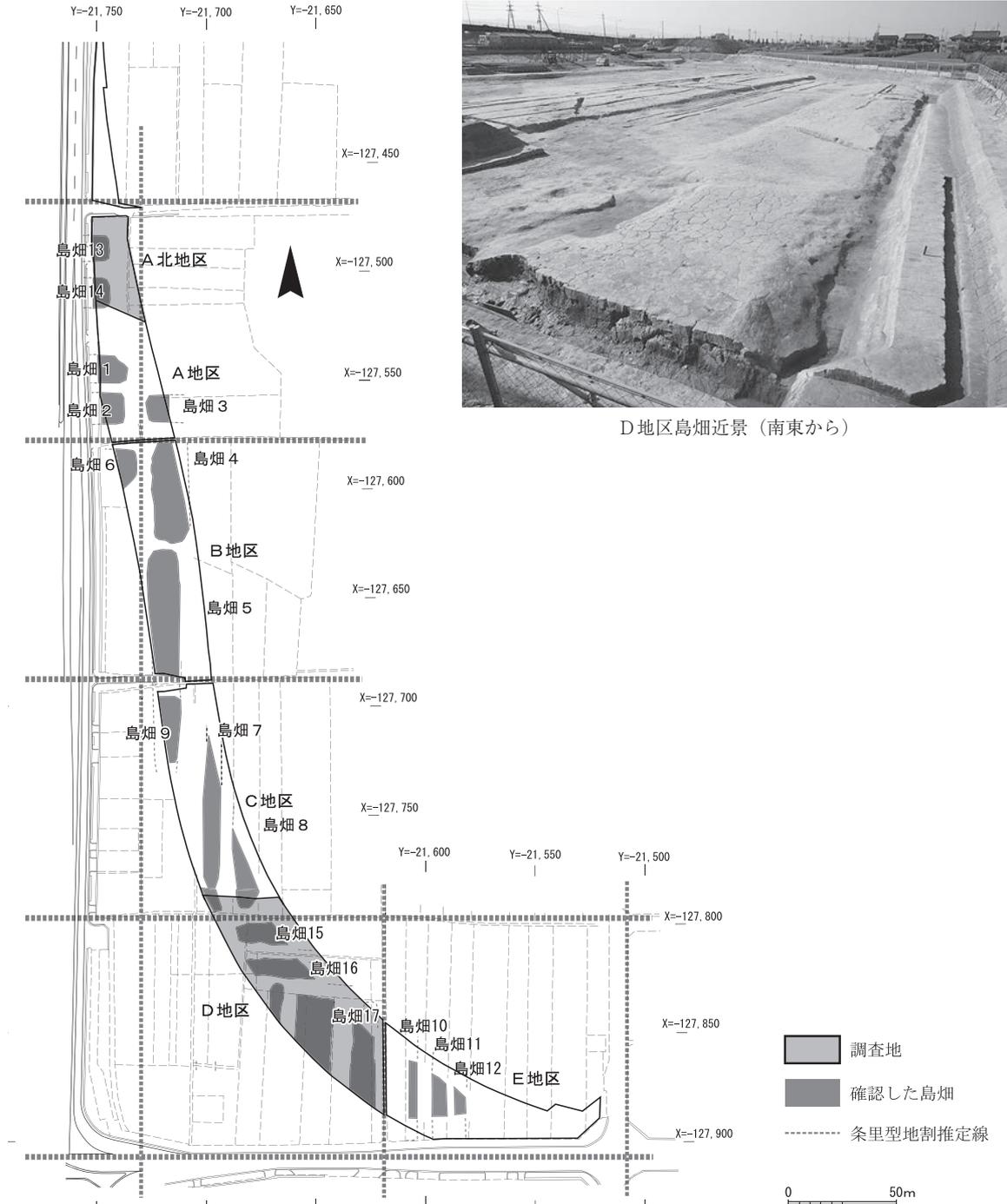
A北地区 トレンチ中央部で東西方向の島畑2か所を検出した。北側の島畑中央部には、島畑の長軸に並行する耕作に伴う溝1条と土坑1基を検出した。

D地区 東西方向の島畑2か所、南北方向の島畑4か所、C地区島畑の南端部分2か所を検出した。島畑上では島畑の長軸に並行する耕作に伴う溝を検出したが、島畑内で収まるものと、島畑外に延びるものが認められる。島畑外に延びるものについては、出土遺物から11～12世紀のものと考えられ、島畑造成時期に先行する水田・畑に伴うものと考えられる。そのほか、南北方向の島畑上では島畑を横断する幅1.2～1.6m、深さ0.6～0.7mの不規則に延びる断面「U」字形の溝を4条検出した。弥生時代後期の遺物が出土している。

まとめ 調査の結果、島畑が立地する微高地はD地区付近が最高所となるようで、これを境に東・西・南・北方向に緩く傾斜していくようである。調査地の北・東・西は城陽市に遺存する条里型地割の一町内(坪)およびその坪境にあたり、検出した島畑も坪内に収まるように造成されている。島畑造成時に、それまで施行されていた条里地割を踏襲して施行されたものと考えられる。また、島畑は現在の



第 1 図 調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 宇治)



D地区島畑近景（南東から）

第2図 調査区および主要遺構配置図

畦畔の方向と一致しており、築造当初から近世、一部は現在に至るまで同じ場所に規模の大小は変化しつつも残っていることが明らかとなった。築造当初から江戸時代にかけての土層において、島畑の栽培作物を特定する目的で、島畑盛土での土壌サンプルを試みたが、良好な堆積土がなく、島畑谷部でのみ種子等が採取できた。谷部での種子等を含んだ堆積土からは、江戸時代以前のものとして、微量ではあるがワタ・アワ等が、江戸時代以降のものとしては、イネ・ワタ・オオムギ・コムギ・ウリ等の栽培種子が採取できた。周辺の島畑の調査において良好な堆積土が確認され、栽培作物が特定されることを期待したい。（増田孝彦）

しもみずし 4. 下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

所在地 城陽市寺田金尾ほか

調査期間 平成25年 4月22日～8月30日

調査面積 3,016㎡

はじめに 今回の調査は新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。下水主遺跡は、縄文時代～近世の遺物散布地である。今回の調査は平成24年度の第1・2次調査に引き続き行われたものである。なお、平成24年度の調査では、各調査区で中世の島畑が検出されたほか、縄文から古墳の各時代の遺構が検出された。

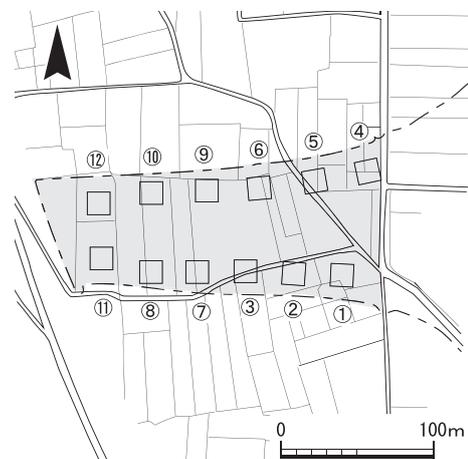
調査概要 今回の調査地はF地区の1～12トレンチである。各トレンチで中世の島畑を検出し、その下層で古代以前の遺構を検出した。ここでは、古代以前の調査成果についてトレンチごとに記す。

1 トレンチ 古代の掘立柱建物を2棟検出した(建物1・2)。建物1は南北4間、東西3間の規模である。柱間は約1.6m、柱穴の掘形は一辺約0.5mの方形であり、建物主軸はN24.5°Wである。建物2は東西・南北に1間分ずつの規模で、調査区外へ展開している。柱穴の掘形は一辺約0.5mの方形で、建物主軸はN23°Wである。

3 トレンチ 平安時代中期・後期の井戸(S E 0311・0308)、弥生時代後期の落ち込み(S X 0309)などを検出した。S E 0311からは、黒色土器B類・土師器皿などが出土した。S E 0308からは瓦器椀や白磁椀などの土器類のほかに、木製品として曲物の底板が4点出土した。S X 0309では土器がまとまって出土した。また、遺構に伴うものではないが、手焙形土器てあぶりも出土している。

6 トレンチ 調査区西半を南北に貫く溝を検出した。長さ10m以上、幅3m以上、深さ約1.5mの規模を持ち、調査区外へと延びる。溝の斜面には護岸の痕跡が確認できた。

7 トレンチ 平安時代前期の井戸(S E 0704)を検出した(写真1)。井戸の掘形は3m以上、井戸枠は約1.2mの規模である。井戸枠構造は方形横板組横棧留である。井戸底には井籠組せいろの水溜施設をもち、拳大の礫敷が施されていた。さらに礫敷の下層には大型の曲物が据えられていた。井戸枠に利用されている木材にはほぞ穴がみられるものがあることから、建築部材を転用したものと考えられる。井戸枠内からは、土器片のほかに、齋串いぐし・横櫛ひしゃく・柄杓・曲物・木皿などの木製品や植物の種子が多数出土した。柄杓は瓢箪の中身をくり抜いて孔を穿ち、柄を差し込んだもので、4点出土している。これらはほぼ同じレベルからまとまって出土した。また、



F地区調査トレンチ配置図(1/5,000)



写真1 井戸S E 0704の井戸枠検出状況(南から)

写真2 竪穴建物S H 1202検出状況(南西から)

曲物と木皿は井籠組の埋土より出土した。

8トレンチ 弥生時代後期の落ち込み(S X 0803)、古墳時代の溝(S D 0801)などを検出した。S X 0803からは、土器が一定量出土した。

9トレンチ 平安時代中期の井戸(S E 0930)、掘立柱建物を検出した。S E 0930は一辺約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.6mである。中から直径約0.5mの曲物が出土した。掘立柱建物は南北方向に3間分の柱列を検出した。柱穴の一つから柱根が出土した。

10トレンチ 弥生時代後期の竪穴建物(S H 1020)を検出した。全容は不明であるが、調査区内では南北約5m、東西約3m分を検出した。建物の一角から土器が多く出土した。

11トレンチ 平安時代の井戸(S E 1110)を検出した。平面八角形の素掘りの井戸で、瓦器椀や土器器皿などが出土した。井戸底からは網代^{あじろ}が出土した。また、弥生時代の土坑(S K 1109)から弥生土器鉢と甕が重なった状態で出土した。土器棺の可能性も考えられる。

12トレンチ 弥生時代後期の竪穴建物(S H 1202)を検出した(写真2)。焼失したとみられ、埋土には炭化物や焼土などが含まれる。平面形は多角形であると考えられる。全容は不明であるが、調査区内では南北約7m、東西約4.5m分を検出した。主柱穴は4か所見つかっており、2か所で柱根が出土した。

まとめ 以上、各トレンチの調査成果について概略をまとめた。なお、2・4・5トレンチにおいては、中世の島畑の下層で顕著な遺構は検出されなかった。

今回の調査区周辺は、調査事例が少なく、遺跡の実態はよく分かっていなかった。本調査では、島畑の形成を確認すると共に弥生時代後期の竪穴建物、平安時代の井戸・掘立柱建物などの遺構を検出し、古代以前の遺跡が存在していることが明らかとなった。

調査地である水主の地は、古代においては水主氏の本拠地であったとされ、また木津川の渡河地点として重要な土地であったことが知られている。今回の調査は、そのような水主地域の歴史を考える上で、大きな成果をもたらしたといえるだろう。

また、本調査地の北側、国道24号線沿いでは、後の調査において、弥生時代後期の溝状遺構から壺形土器がまとまって出土した。弥生時代の集落遺跡がさらに北側に展開する可能性も考えられ、今後の調査が期待される。

(岡田健吾)

まついおうけつぐん
5. 松井横穴群第 3 次 (12 トレンチ)

所在地 京田辺市松井上西浦ほか

調査期間 平成25年 4 月22日～平成26年 2 月27日 (予定)

調査面積 1,800㎡

はじめに 松井横穴群は明治期から学会誌に報告されるなど、はやくから注目されていた横穴墓群である。平成23年度から新名神高速道路整備事業に先立つ発掘調査を行っており、調査の経過については本誌先号でも略報している。第3次となる平成25年度調査では、12トレンチ北半部の墓道・玄室の調査を行い、一部(S X18)を除き終了している。ここでは12トレンチの状況について報告する。

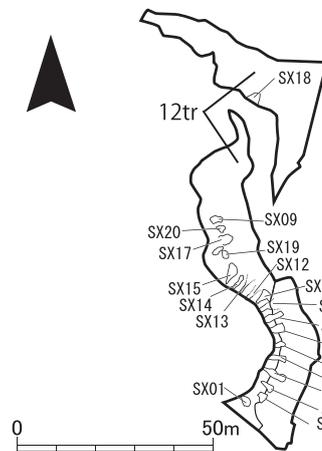
調査状況 12トレンチは丘陵から北に延びる尾根の西斜面にあたる。横穴墓は西に墓道に向けて連なるように造られており、計18基を検出した(S X18を除く)。この西斜面は削平を受けており、S X19より北の4基は玄室のみの調査となった。墓道が残存していた横穴墓も、先端部は削平を受けており、横穴墓間の通路の有無は確認できなかった。墓道から玄室へは1.5m程度の比高がある。多くの墓道には3段程度の段があり、玄室へは階段を上る格好となる。この点が松井横穴群の大きな特徴である。

玄室の天井部は崩落しており、ほとんど残存していない。平面形は、墓道から玄室奥にかけて徳利形を呈する。玄室に骨が残存していたのはS X19のみで、長管骨と歯を確認したが、解剖学的位置にない。副葬品は、土器類では須恵器杯・高杯・台付長頸壺・横瓶が多く、少量の土師器杯・甕もある。他の副葬品には耳環、鉄鏃、刀子などがある。副葬品のあり方は、横穴墓一つあたりに須恵器1・2点という状況が多く、鉄鏃や土器を多く伴う横穴墓は限られている。土器型式はT K209～飛鳥Ⅱの範疇におさまり、6世紀後半から7世紀中頃の年代が与えられる。

(加藤雅士)



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 12トレンチ遺構配置図(1/2,000)

6. ^{なか}中古墳群第2次・^{みっかいち}三日市遺跡確認調査

所在地 亀岡市千歳町千歳

調査期間 平成25年7月11日～11月7日

調査面積 1,250㎡

はじめに 今回の発掘調査は主要地方道亀岡園部線の建設に先立って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したもので、中古墳群と三日市遺跡の2遺跡についての調査を実施した。中古墳群は、亀岡市東部の丘陵斜面上に立地し、出雲遺跡と重複する。当古墳群は平成18年度に行われた国営農地整備事業に伴う発掘調査で新たに確認された古墳群で、今回の調査で古墳群の続きが検出されるものと期待された。また、三日市遺跡では調査範囲を確認することを目的に4か所の小規模なトレンチを設定して調査を実施した。

調査概要 中古墳群では、道路建設予定地内に1,000㎡の調査区を設定して調査を実施した。調査の結果、中古墳群に関連する遺構は検出されなかったが、出雲遺跡に関連する遺構として、柱穴や土坑など10基あまりを確認した。また、中古墳群に伴うと思われる遺物として、古墳時代中期末から後期初めにかけての須恵器や勾玉・管玉各1点などが出土した。さらに、出雲遺跡に関連する遺物として中世の土器類が多数出土した。ただし、古墳時代ならびに中世の遺物の大半は、近世以降の水田整備に伴う二次的な堆積層からの出土であり、先の遺構を除き、明確な遺構は確認されなかった。三日市遺跡では、4か所の調査区(1～4トレンチ)を設定して調査を実施した(合計250㎡)。調査の結果、2・3トレンチで旧耕作土の上面から15m前後で火山灰層を確認した。この火山灰は約30,000年前に噴火した始良^{あいら}Tn火山灰と考えられる。



調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 亀岡)

まとめ 中古墳群では、若干の遺物が出土したものの、古墳の痕跡は確認できなかった。仮に古墳が存在したとしても、近世以降に削平されたと思われる。また、出雲遺跡に関連する遺構・遺物も少量ながら確認できたが、掘立柱建物などは復元できなかった。集落の中心部はもう少し離れたところに所在すると推定される。三日市遺跡では、今回の調査では確認できなかったが、調査地周辺に旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性がある。

(筒井崇史)

美濃山廃寺出土冶金関連遺物について（補遺）

関広尚世

1. はじめに

美濃山廃寺第6・7次調査では、鍛冶関連遺構及び銅溶解炉が検出され、冶金関連遺物が多数出土した。これらの遺物の大半は『京都府遺跡調査報告集』第154冊^(註)で報告した。本稿ではこれらの報告を踏まえ、新たに確認した鋳型片について追加報告したい。

2. 美濃山廃寺冶金関連遺構の概要

美濃山廃寺周辺では、西山廃寺や志水廃寺といった古代寺院も存在するが、これまでに冶金関連遺構は確認されていない。新名神高速道路建設工事等に伴う第6・7次調査で検出された遺構群は、7世紀末～9世紀初頭までⅣ期6区分の変遷をたどったと推定される。冶金関連遺構は、丘陵南東部から東部にかけて分布するが、B地区で検出した銅溶解炉S L 1はⅡ期に属し、A地区南部で検出した鍛冶関連遺構群はⅠ期に属すると考えられる。また、同地区中央部ではS K 091とS L 485においても焼土が認められ、冶金に関連する遺構と考えられる。

3. 出土鋳型片について

①出土遺構

新たに確認した鋳型はA区鍛冶関連遺構群の溶解炉S L 511および土坑S K 091から出土した。

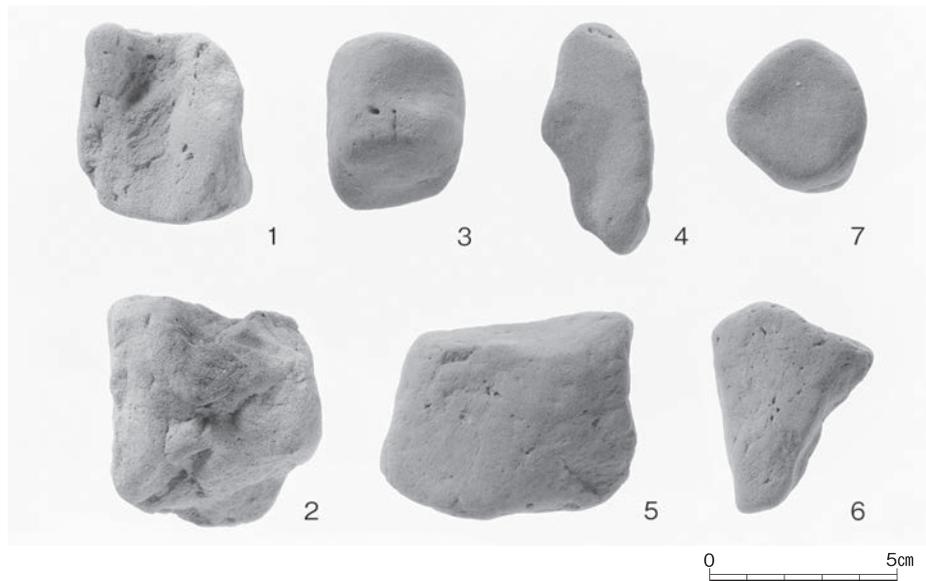
S L 511は長辺2.1m、短辺0.7m、隅丸方形の平面形を呈し、遺構内北側からは大量の鋳滓が溶着したとみられる炉壁片が出土した。これらの炉壁片は2013年12月現在、化学分析中である。

S K 091は長辺2.8m、短辺1.8m、隅丸方形の平面形を呈し、第2層では焼土が多く認められた。東端は後世に攪乱を受けている。出土した須恵器杯蓋からⅡ期に属する遺構と考えられる。

②鋳型片の概要

鋳型は計測が可能なもので7点出土した(写真)。

1はS K 091から出土した。最大長5.3cm、最大幅4.5cm、厚さ5.9cmで、重さ103.9gである。外面は明黄褐色10YR7/6、内面は浅黄橙色10YR8/4である。2はS K 091から出土した。最大長6.2cm、最大幅5.6cm、厚さ4.3cmで、重さ110.8gである。外面は明黄褐色7.5YR7/6、内面は灰色5Y4/1である。3はS L 511から出土した。最大長4.3cm、最大幅3.8cm、厚さ3.1cmで、重さ43.9gである。外面は橙色7.5YR6/6、内面は暗灰黄色2.5Y4/2である。4はS L 511から出土した。最大長6.3cm、最大幅2.9cm、厚さ1.9cmで、重さ27.3gである。外面は明黄褐色2.5YR6/6、内面は黄褐色2.5Y5/3である。5はS L 511から出土した。最大長5.3cm、最大幅6.4cm、厚さ3.4cmで、



S L 511 および S K 091 出土鋳型

重さ94.5gである。外面は明黄褐色10YR6/6、内面はにぶい黄褐色10YR4/3である。6はS L 511から出土した。最大長5.6cm、最大幅4.3cm、厚さ1.9cmで、重さ30.9gである。外面は明黄褐色10YR6/6、内面は暗灰黄色2.5YR5/2である。7はS L 511から出土した。最大長4.0cm、最大幅3.7cm、厚さ2.8cmで、重さ30.5gである。外面は橙色7.5YR6/6、内面は暗灰黄色2.5Y4/2である。

鋳型には、^{まね}真土が用いられる。これは川砂に粘土を混ぜて700～800℃で焼成し、砕いた後にふるいにかけてのもので、真土のなかでも鋳造物に近い(鋳肌)側には目の細かい紙土、鋳型の合わせ目になるところには玉土、これらを補強するのに粒子の粗い荒土が用いられる。本稿で取り扱った鋳型はS L 511とS K 091ともに目の細かな胎土であることから、鋳肌側に近い紙土と呼ばれる部分の破片と考えられる。

4. おわりに

第6次調査B地区S L 1の検出状況や遺物出土状況からは、小型の^{こしきろ}甑炉が想定され、また銅塊の化学分析からは比較的純度の高い砒素銅であることから、同炉が溶解目的で、小型製品の製造を目的としたものであると考えられてきた。また、時期的にも美濃山廃寺Ⅱ期以降に溶解が行われたと考えられてきたが、Ⅰ期に属する鍛冶関連遺構内S L 511から3～7が出土しているため、鋳造製品が寺院創建期から美濃山廃寺周辺で製作されていた可能性が高まった。S K 091は遺構の状態から溶解炉であるとは断定できないが、少なくとも関連する施設であった可能性がある。S L 511出土遺物については、現在、化学分析も実施中である。今後、その成果とともに美濃山廃寺における鋳造技術の実態解明を進めていきたい。

(せきひろ・なおよ＝当調査研究センター調査課調査第3係調査員)

注 石井清司・伊野近富・筒井崇史・関広尚世ほか「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」・「美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013

資料紹介

美濃山瓦窯跡から出土した「西寺」文字瓦

引原茂治

1. はじめに

美濃山瓦窯跡は、八幡市美濃山古寺に所在し、八幡市の南部、京田辺市との境近くの丘陵部に位置する。古代寺院跡の美濃山廃寺に隣接している。この窯跡では、5基の瓦窯を検出しており、確認した順番に1～5号窯の番号を付した。1号窯は美濃山廃寺の南側に、2～5号窯は美濃山廃寺北東側の丘陵東側斜面地に築窯されている。

2. 窯跡の概要

1号窯は、^{あな}窰窯で、燃烧部のみが残存していた。美濃山廃寺創建期の軒平瓦が出土しており、7世紀後半～8世紀初め頃の窯とみられる。2号窯は、平窯3基が順次造り替えられていることが判明した。また、出土した軒瓦は八幡市志水廃寺出土の軒瓦と同範とみられ、周辺寺院にも瓦を供給していたと考えられる。操業時期は、8世紀後半頃と考えられる。3号窯は、窰窯で、焼成室の下半部、^{たき}燃烧室、^{くち}焚口、前庭部が残存していた。操業時期は8世紀前半頃と考えられる。4号窯は有畦式平窯^{ゆうけいしき}で、焼成室が部分的に残存する。9世紀頃に操業した窯と考えられる。5号窯は、4号窯の南側に隣接して築窯される。4号窯と同様の有畦式平窯で、焼成室と^{たき}燃烧室が残存する。構造や立地から、4号窯と同じく9世紀頃に操業したと考えられる。4・5号窯は、常に瓦を生産できる体制を維持するために交互に操業していた可能性もある。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 淀)

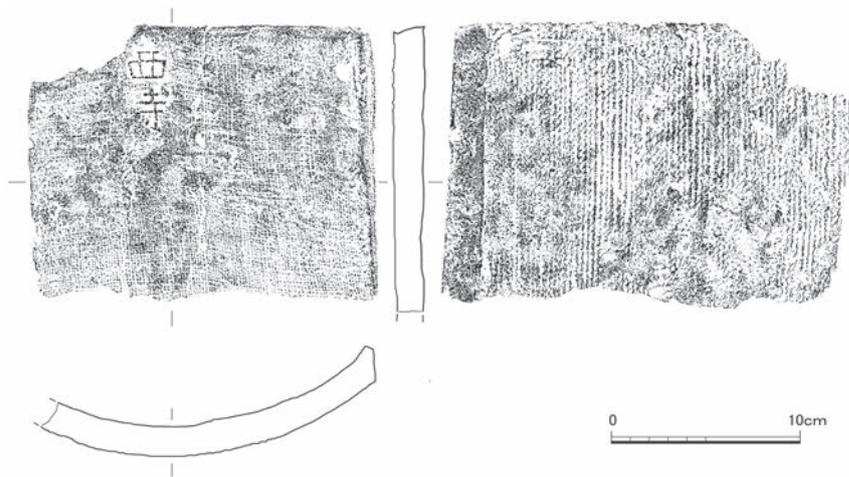
3. 出土した文字瓦

文字瓦は、残存長15.4cm、残存幅17.8cm、厚さ1.6cmの破片である。4号窯から畦の構築材として利用されていた。凹面には布目、凸面にはやや細かい縄タキがみとめられる。胎土には白色の砂粒を含む。

形状は平瓦であり、^{のし}熨斗瓦として焼成された可能性もある。凹面に「西寺」と押印される。1970年に平安博物館によって実施された京都市立唐橋小学校のプー



「西寺」文字瓦



第2図 「西寺」文字瓦実測図 (S=1/4)

ものと考えられる。

ル建設に伴う調査で出土した瓦片に、同様の押印を持つものがある。出土地は西寺の南東隅部にあった灌頂院かんじょういんの北築地部分にあたる。このことから、今回出土した文字瓦は本来西寺のために焼成された

4. 小結

西寺は、平安京の中央を南北に延びる朱雀大路をはさんで東寺と対称の位置に建立された官寺である。平安京遷都(794年)直後から造営が開始され、弘仁14(823)年頃までには完成していたと考えられている。その後、東寺は空海に下賜され、真言密教の寺として繁栄し、現在まで存続している。西寺は律令体制が崩壊していくにつれて衰退し、鎌倉時代に焼失して以後、再建されることはなかった。現在、西寺跡には講堂基壇跡が残り、一帯は国指定史跡となっている。

出土した文字瓦は、窯の構築材として出土しており、4号窯で焼成されたものかどうかは明確ではない。また、4・5号窯ともに灰原が残存しておらず、どのような瓦を焼成したか特定できない。これらの窯から出土した瓦は、窯の構築材や補修材として使用されたものがほとんどである。ただ、付近で瓦片などは容易に入手できる環境でもある。

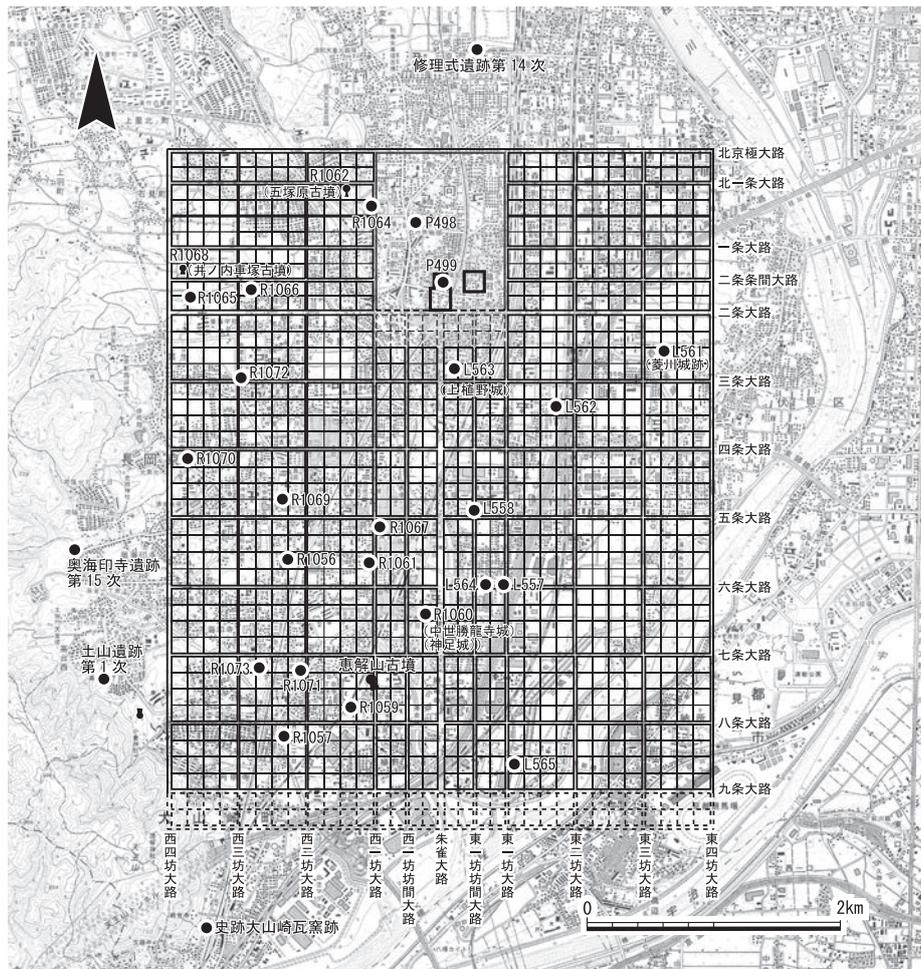
文字瓦の胎土は、他の出土瓦に較べてやや砂粒を多く含んでいる。他の瓦窯で焼成された瓦が持ち込まれた可能性も考えられる。西寺の瓦を焼成した窯としては、美濃山瓦窯から西側約5kmの大阪府枚方市阪瓦窯さかがようが、従来から知られている。阪瓦窯に近接する枚方市九頭神麿寺くずがみでも西寺関係の文字瓦が出土している。字体などから、美濃山瓦窯出土瓦の印とは異なっているが、西寺関係の瓦が周辺寺院にも供給されていることがわかる。美濃山瓦窯の本来の供給先であった美濃山麿寺は、創建時に九頭神麿寺と同文の軒瓦を使用しており、係わりが深いことが指摘されている。このような地域的な係わりのなかで、美濃山麿寺に阪瓦窯から瓦が供給された可能性も考えられる。供給された瓦が4号窯の構築材に転用されたという見方もできる。また、美濃山瓦窯は、窯構築に文字瓦を転用しただけで、直接西寺の瓦生産に係ってはいないという見方もできよう。このように、今回出土した文字瓦は、様々な可能性を考えさせる資料である。また、阪瓦窯や九頭神麿寺がある北河内地域と美濃山麿寺・瓦窯がある南山城地域の国を超えた交流を想定させる資料でもある。今後とも検討を要する資料といえる。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査課調査第1係主任調査員)

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成25年6月から10月の例会では、宮域2件、右京域18件、左京域11件、京域外6件の合計37件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 宮499次(向日市鶏冠井町)では、大極殿院の南東部で旗竿掘形が検出され、宮廷儀式の際に立てられた宝幢ほうどうがさらに東側に展開していくことが明らかとなった。

右京域 右京第1056次調査(長岡京市天神)では、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の土坑、古墳時代前期の竪穴建物5基、平安時代の溝・掘立柱建物が検出された。竪穴建物には地床炉と深い支柱穴がある。右京第1057次調査(長岡京市調子)では、小泉川の洪水礫層の上面で長岡京期から室町時代の遺物包含層を認め、中世の東西溝4条が検出された。右京第1059次調査(長岡京市久貝)では、長岡京期の幅15mを測る大溝と長岡藩主永井直清の勝竜寺城下の町屋に関わる17



調査地位置図 (1/60,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

世紀前半の井戸・土坑が検出された。右京第1060次調査(長岡京市東神足)では、細川藤孝の勝竜寺城「神足屋敷」地区の公園化に伴い、現存する土塁と空堀の調査が行われ、その構築方法や築造時の規模、空堀にかかる土橋の存在が明らかになった。右京第1062次調査(向日市寺戸町)では、長岡丘陵上に営まれた前期古墳である五塚原古墳の東くびれ部において、墳丘基底部と斜面に施された葺石が確認された。また、1段に築成された前方部から2段築成の後円部の接続部で頂部に造られた隆起斜道の存在が明らかとなった。埴輪や供膳土器は出土しなかった。右京第1066次調査(長岡京市井ノ内)では、弥生時代中期と古墳時代後期の土坑、方形掘形の柱穴が検出された。右京第1067次調査(長岡京市開田)では、一辺約7mを測る方墳の周溝と、韓式系平底壺2点が据え置かれた溝中土坑が確認された。右京第1068次調査(長岡京市井ノ内)では、井ノ内車塚古墳第6次調査として、墳丘の西側の調査が実施された。前方部は段築・葺石がなく、周濠内に多量の埴輪類(馬・人物・石見型埴輪を含む^{いわみがた})が二次堆積していた。後円部裾では周濠内に盛土された高まりが構築されており、造り出しの存在を示す成果が得られた。埴輪を包含する流土に緑釉陶器が含まれ、平安時代にすでに墳丘外表が削平されていたことがわかった。右京第1069次調査(長岡京市長岡)では、縄文時代の落とし穴、正方位に軸を揃える奈良時代の溝(墨書土器出土)と柵、非常に深く「V」字に掘られた長岡京五条条間南小路の北側溝と同時期の掘立柱建物・東西溝・柵が検出された。右京第1070次調査(長岡京市長法寺)では、弥生時代の中核的環濠集落である長法寺遺跡の一面で、弥生時代後期初頭の環濠と竪穴建物が新たに検出された。竪穴建物は直径約9mと大型で中央ピットを備える。右京第1072次調査(長岡京市今里)では、多重に切り合う奈良時代の掘立柱建物群と中世の総柱建物や溝が検出された。

左京域 左京第557次調査(長岡京市神足)では、長岡京東一坊大路と六条大路の交差点が調査され、大路側溝および北西宅地の内溝が検出され、内部から漆紗冠^{しっしゃかん}・漆皮箱^{しっぴぼこ}・皇朝銭10枚などが出土した。側溝の交点付近では幅の広い側溝に架けられた橋の橋脚が残り、付近から獣骨がまわって出土した。路面上に土器棺と長さ1mの木棺墓が営まれていた。また、下層には古墳時代前期と弥生時代後期の自然流路があり、水辺では古墳時代前期の掘立柱建物2棟を確認した。右京第558次調査(長岡京市馬場)では、幅1m規模の長岡京東一坊大路の東側溝を確認した。右京第561次調査(京都市伏見区久我)では、長岡京七条条間小路の路面と両側溝、鎌倉時代の「L」字溝・柱穴群の下層遺構の上位で、16世紀に遡上する羽束師・菱川城に伴う堀と土塁の基底が確認された。17世紀には堀が埋め戻され土塁も整地土で埋められて、礎石建物が建てられる。左京第562次調査(向日市上植野)では、古墳時代前期の包含層、後期の落ち込みと溝、長岡京東二坊坊間東小路の西側溝を検出した。左京第563次調査(向日市上植野)では、長岡京期の建物基壇を囲う地覆石抜き取り溝と柱掘形、及び上植野城(秋田館)に伴う堀と内溝・東西溝を検出した。

京域外 史跡大山崎瓦窯(乙訓郡大山崎町大山崎)では、南に開口する1号窯の西側で新たに2基の平窯を確認した。焚き口の位置を揃え、2基一対を単位とする、窯の高い企画性が、南辺にも適用されている可能性が高まった。(伊賀高弘)

普及啓発事業（平成25年7月～11月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第125回埋蔵文化財セミナーを、8月24日(土)に向日市民会館第1会議室で実施しました。

『関白・夢のあと－秀吉の京－』をテーマとして昨年度当調査研究センターが実施した聚楽第跡の調査について報告したのち、同志社大学教授の鋤柄俊夫氏から「聚楽第にみる秀吉の城造りと町造り」という御講演をいただきました。

報告では、聚楽第本丸の石垣を中心とした調査成果を紹介し、その構造と意義について分析を行いました。

講演では、聚楽第の研究史を多角的に捉えつつ、これまでの発掘調査成果を科学的に分析し、さらに秀吉の京と伏見、大坂と堺など都市と外港を核とした都市計画の構想と施工が、慶長伏見地震を境に大きく転換するという考えを提示していただきました。当日は、雨天にも関わらず、121名の参加者を得て盛況のうちに終了することができました。

第28回小さな展覧会

平成24年度京都市内遺跡発掘調査成果速報として、8月17日(土)から9月1日(日)まで延べ14日間の会期で、向日市文化資料館を会場に実施しました。昨年度、本丸石垣が検出された聚楽第の成果を中心に、重要文化財の「京都府聚楽第出土金箔瓦」の展示も含めた企画展も併せて行いました。1,590名の参加を得て盛況のうちに終えることができました。

現地説明会

7月6日(土)の与謝野町石田谷遺跡の説明会では、弥生時代後期の円形竪穴建物と土器類が投棄された谷地形、奈良時代後半から平安時代初頭の柱穴群などが公開され、67名の見学者を得ました。

8月3日(土)の城陽市下水主遺跡・水主神社東遺跡の説明会では、13世紀前半から造成され



第125回埋蔵文化財セミナー



第28回小さな展覧会



石田谷遺跡現地説明会

た島畑と、平安時代の掘立柱建物・井戸、弥生時代後期の円形竪穴建物、そして縄文時代晩期の突帯文土器について公開し、120名の参加を得ました。

10月13日(日)の亀岡市出雲遺跡の説明会では、弥生時代後期の土坑、古墳時代中期の竪穴建物、古代の掘立柱建物、輸入陶磁器類などを含む12世紀後半の溝について解説し、104名の参加を得ました。



下水主遺跡・水主神社東遺跡現地説明会

11月23日(土・祝)の舞鶴市大川遺跡の説明会では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての柵と溝で区画された掘立柱建物からなる集落遺構について紹介し、あわせて滑石製石鍋・土錘、ぞうがん象嵌青磁を含む貿易陶磁器や宋銭、さおばかり竿秤に用いられた金属製錘など、由良川の水運を利用した広域流通の証となる遺物について解説し、71名の参加を得て盛況のうちに終わりました。

遺跡見学

9月27日(金)に大川遺跡で舞鶴市立岡田小学校児童の遺跡見学会が実施されました。折しも由良川流域が台風18号の水害により甚大な被害を受けた直後であり、学校行事が中止になるなど心の傷が癒えない中での開催でしたが、参加した11名の児童は、校区の歴史を目の当たりにして、興味深く耳を傾け、後日、感動を伝える文集が届けられました。(伊賀高弘)



出雲遺跡現地説明会



岡田小学校から寄せられた感想文集



大川遺跡現地説明会

センターの動向

(平成25年8月～11月)

月 日	事 項
8 3	下水主遺跡・水主神社東遺跡(城陽市、新名神・24号線関係)現地説明会(参加者120名)
17	第28回小さな展覧会開催(於:向日市文化資料館)
18	関西考古学の日:講座1「勾玉をつくろう!-1」(於:当センター、参加者31名)
24	関西考古学の日:講座1「勾玉をつくろう!-2」(於:当センター、参加者28名) 第125回埋蔵文化財セミナー「関白・夢のあと～秀吉の京～」(於:向日市民会館、参加者121名)
25	関西考古学の日:講座1「勾玉をつくろう!-3・4」(於:当センター、参加者23名・14名)
27	平成25年度役員等協議会(於:当センター)
28	長岡京連絡協議会(於:当センター)
31	関西考古学の日:講座2「昔のお金をつくってみよう-1・2」(於:当センター、参加者28名・26名)
9 1	第28回小さな展覧会閉会(8/17～、入館者総計1,590名) 関西考古学の日:講座2「昔のお金をつくってみよう-3」(於:当センター、参加者15名)
12	亀岡市教育委員会教育長 出雲遺跡(亀岡市)現地視察
25	長岡京連絡協議会(於:当センター)
26	京都府政を見る会(宇治・城陽・久御山市民40名)センター見学
10 13	出雲遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者104名)
16	出雲遺跡(亀岡市)調査終了(7/8～)
19	関西考古学の日:考古学講座「考古学でみる淀川流域の治水」講師:中川和哉 調査課調査第1係長(於:当センター、参加者14名)
23	長岡京連絡協議会(於:当センター)
30	開田遺跡(長岡京市)調査終了(7/22～)
11 1	増田富士雄理事 中古墳群(亀岡市)現地視察
7	中古墳群(亀岡市)調査終了(7/11～)
15	平成25年度第2回遺跡検討会(美濃山瓦窯跡、於:当センター)
18	椋ノ木遺跡(精華町)近隣幼稚園児見学
21	中谷雅治理事 下水主遺跡(城陽市)・松井横穴群(京田辺市)現地視察
23	大川遺跡(舞鶴市)現地説明会(参加者71名)
24	長岡京連絡協議会(於:当センター)
30	関西考古学の日:考古学講座「黄泉の国への葬送儀礼 -古事記と考古学-」 講師:岩松保調査課調査第2係長(於:当センター、参加者32名)

編集後記

記録的な猛暑をもたらした夏の高気圧は、太平洋の海水温上昇を引き起こし、例年になく多くの台風が発生しました。なかでも台風18号は記録的な大雨をもたらし、「京都水害」と命名された洪水災害を羅災しました。

当調査研究センターの発掘現場も、各所で被害を受けました。工期はやや遅れたものの順調に復旧することができました。

今年度2冊目となる京都府埋蔵文化財情報第122号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、平成25年度に着手した京都府内の埋蔵文化財調査の速報とともに、「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向」の続編を掲載し、あわせて、美濃山廃寺および瓦窯跡出土の注目すべき出土品に関する資料紹介文を2篇掲載いたしました。

是非ともご一読ください。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第122号

平成25年12月31日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER